七郎婆心録　冬日　一

へ 5
1261
1

七部集心録一巻

曲翁述

○同注の大概

一印に亟相と云とあるものを
勢する歌方と附句に付て是を付課ひ
子定まるとも未だ付しわ柄定まれ付句の
発る初一会に次は丈人付句に付て付句の用と付
うあるとて宮古は出てるに社会の人丈を云
ある物ちいろある作ちいろある人ちいろある用ち
いろある情ちいろある物ちいろ十二の法を定めある
おを求る歌句の方と物てあるる後句のお柄
そもれ中に丈次に丈と歌句ちと合成も
古俳仏を含て句を作る和弁あるは
金情をも付る句作の法そもれ終く
ゆ氏一句の中に始中終を雑綜するあり吊句を
祖義正格の者ちより老出て書に社友を

なすべきを除く外に大方諸句の注ち
一向に分ぬ句と上よりの法八百の内一万欠
る分句欄外されも此六のお表程隠れ
れい宴に表に隠るる所を注て隠るる所を者
けい凡て注の字三等まんとあてて入よう
諸句の乗方は整中あり文章を記憶に十注
は有ん向分に中に中に会釈に
文注と逆句やり句に上り諸子の異る所多名
あれとも殆所い整中をのやく記憶に諸句
の一字一云も浅き寸を新千る梅百く会釈に
百の内まいお句分る仮はさ一点事新し
る新は文句る新方は諸句を乗文新千舎
釈して文書るとて入こと色附山は木れは与けと
会釈して整句分るを会釈に大句る悲く逆句に
俗習のえこと口お句と貴おきお文文一をいも
実い新き句あれと宴を仮表の体悩とう句句

の中句句一も多き所い新逆句も自性と乗一尺
すれ和てたう仮逆句まるおく色世宴い逆句
悩と云雲るてつさとなきる句すい逆字の文新
く今句仮は印て乗方の法仮と考しむ
い仮く文く 会釈く中く●○逆句く整く
記憶の曲云く●○会釈の出帝く非中書い
文く白い整く整中文の中を小分して新て十
通く新つるく曲云ある新は横作ふしさて中
●○新句の注分は入て文独を注し試は
自句と分るいう句るおるも記憶ちるく乗
方の自立を新めやり句い仮表の母ぬるれと
一注尺一功共のわく手入代らる時は余文く
出来しるを悩めむれの左原母印く宴はて
三乗い十注の尺と仮るのく文書は句句い凡句
記憶三千会釈六十逆句十もり出と大日実
あるは仮も速くしの尺い力仏は記憶九余句ある

[illegible]

[illegible]

[illegible]

て其姿のあのおのの位とおのおのの面を直に作て
付る法と云ハおのおのをいうまくと和らぎ解き
又又てハ和て解き離る時ハ法を用ゆ
仕く再付ある和を考見よ
三和の句をもまもる二句と又る法あり二ハ和二法の
もくおのおを別す又伺ま和てと解る業方ま
も其句「殺手句」舞手業の宮麻刈と云寄
の集あじ出分句の又出のもく後句ま其歳
云の次第句を付る中定法と
「扇作」はん目い戸始て呉くりコハ已上の巳法を
ゆて和句を直後さじとてい千句ゆても麻ま
る附ま和句を雅さ寸其句を昼仲あ。あま人
ちる法く法に義の外ま能さる人きや義の
秘密ゆも爰ゆも語あ中者れ法門人のさ
もあれと者ま法あくてい付さる五一を
二万千を一万出来る中あるま故て等し

ておのれ考ゆる焼さま今是をあむく熟七
部の中ゆ門人句ま の捨一を入るま法あく
で句ゆ五を扇分ま仕換る五あ。あり凡
其用を表て作る次ま其法を表て作る
句を作る其次い大方「扇体」の用物あれ定い必
法の用ゆとおを又定る中ゆて集中仕く
弁一れと程ゆ。そ法ゆ人意殺を表て後世
ま作く法の強さ心じる中を計のくり

殺句の句法案

「殺句」人情の句へ山川生枝の系あ。其人情を
淮て分る其次の句い其淮あを実系の山川
生枝と又て分る中定法く一句の中五七字の
淮ある時ハ支付実系ま変すく美再淮
中ま抜る時ハ中の淮お変ま
「逆付」コハ戸ゆ改々く古本隠付ゆ前後の
移あれい順逆の句ゆて改む門ま木槿を挟

むびもち 鳥
中は木槿を挾むひもおけは今なりとおくと
て結ぶ 以逆付の次に極て次付と二句並て
逆付する事決てあり又は留て留の位大
方逆付の時孤角く
一程付只句の往かて付る句と付句の次い
必正面まえる事定法「乃のへはちかしる
祢宜ら麻「生する比とらふ事「チヤ二年モセズト
いうとうとうとあを雑父又る体と又あと
一文は捨ての用 以名目も印始て号う宣
捷は似て結句元出しに元句の又ちう表こ
又情文人の用を求るあい文用ばり文は捨ての用は
又ちの傍ようえちは能て求る用く文用に付
方に二句と張れすは文は能ての用いる続て
変化て面白き法あれいんうくへきる事
一宣撰 一百三十四句 わく注の傍は印する宣撰

出結句元の次者く者の付方は句の又ちは宣撰
て結句とれとも二八〇大園実くる結句のまう
又一結の結句を求る法名れい付孔の懐法く金語
ふき付るく 茶十七 義曰三字三字の結句事
ふ寸五体八体の付方まちふ宣撰といふ
東方ねて文附文句まあるい文字の乃
程ふ云うとうとうされいる句は三不ら正如
ある〜 句は三八句の 三十余句ちり 程句は房て体祇は不付の如不ありと
我家の秘法とふ也 宣撰付方ふ法の五方の
大句 ある事 豆腐の弁は春〜 諸は付
付方い甚 大事の秘法名れも情んふ五撰
門人の後後は法りう文法は七ア中の宣撰付
を受注者の表付表を知遠るをもて方し
文宣撰易ふ如ふの事撰も宣撰とふ付方あ
まちるさるい八体の位極は度ふひさす自を

[illegible]て此[illegible]返すこと[illegible]と其姿の浮ひくる妻[illegible]
[illegible]の作[illegible]い人[illegible]ある[illegible]
[illegible]ること[illegible]と[illegible]る村[illegible]
[illegible]ふく[illegible]付を思[illegible]の[illegible]
除[illegible]の[illegible]を[illegible]の再[illegible]
又[illegible]付おそつけ又[illegible]付[illegible]
る[illegible]付おを[illegible]付むし
[illegible]の移[illegible]
[illegible]き[illegible]の[illegible]及其
業[illegible]人[illegible]法[illegible]
[illegible]る[illegible]今[illegible]
[illegible]む[illegible]姿の[illegible]
来の[illegible]付[illegible]
[illegible]付[illegible]
[illegible]

白作の内三条

白作の法[illegible]の[illegible]
[illegible]

付白も[illegible]おかりよ作る[illegible]又
[illegible]白手[illegible]の[illegible]
て付孔の[illegible]
[illegible]作る[illegible]
[illegible]白て[illegible]の表[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]

句の姿あるべき宜敷
落句不用の落句はいとよい所も亦多要之
一狂中に法はんはあるべし一尺の中を五寸目にて作
るべきなり然れども目まぶしくて作る時は付所い
よく少なるべし
句の西へも来ても句のあるべき所をあらく
飛るにもなるにしてまた又寸法は長短作る
人の持て出る長寸の余情深く宮殿も実は能て
の用に成る寸の作り又七八寸は長短る時は
と共に天服天年ともなり難き迷あるべし
しばらくはうすく見る時は百句参記はそ
分ても出い程は微妙に句あるべしと出て
あるべきと人は句作の法は除き人の問
已上十三条は三法の大条なれども整能なれ
句毎にかく注寸新にて又は新句作の三法
段々に備る法并余数多あるべし

附句又は長は出は英さむとするは企さるべ
あるべし形質如草露運命似雷光も登
草の篠笠を笑て雨あれども朱の戸を敲く
伝来あらんと唯其人をお待作べし
一雅云い僕は所力すもて次べし程云いあるべし
べく俗多おのもべ他也とあるべし付句の中又
又は出分られと自注の又は結解てべき用べし
都て注文は俗字略字を用べし
一本出は仮名遣正字遣の遣まあるべい
結引出べし又辞遣と見るもあるべそを辞の
意を注する時は付乱出べあるべとあれい作者
の意を仮て為句べ辞は也一倍は□□
□を入て其宜ある辞を出入○ノトはべい
なべ〜改べ〜ちびハ也トシテ御ハ也〜トハ也
去あれいべト扶生は作べ〜あべ〜出べ其
比い云毛の乃一夜相れ〜時あれい身人も

又あるべき又稀ヨ付れんもうすべきもあるべ
經中之の十印を者て注ぐ〻ヨ論ひ卦
の上ヨ▲の月印を入さう以ものの淅を發便
さむ中いたのあるあるある

[illegible]い引出及先注の出入凡て引出い
原文を約す「　」皆出ハ[illegible]ある
引書及先注本の文の限り――――[illegible]
印さん要文「　――――」[illegible]余略し

テ　他世てまれ　京師井有国
七　七部搜　西村ノ本換テ全カラス　江戸　栗太
翁　冬日翁　同所　加賀　冨吏
注翁　冬日注翁　限巻　升六

翁注翁の二出今板木全くき
古　古集雜　蓬莱注　出羽　杜哉
ア　武出　冬一甄一蓬一蓬一注　コハ尾西村の写本
作者不知ハ凡そ出とする中の一と見セ
俳注　附合集浮注　義村句注　字義　寓老
大　七部大後　七ア抜注　伝説　何九
玉　大後ヨリ出ずる宝暦より文政迄の注出入更
出世五部ヲとゝとも尾西村の外入さ他

てまれおのゝ中い大後中ハさゝ[illegible]
成　江戸成美　肥後号宝　無味乾　太印　瓦谷
五方　芝山　皆大後中ハ[illegible]る人〻
ツ　さるゝの逆志抄　江戸　空然
梅　梅林茶後　炭オ力伝注　加賀　梅宝
以外ハ[illegible]の注ハい更ハ[illegible]名を記す
○再板の考正
冬日去日ハ[illegible]ひさこの尼集享保元文の
ゝ冬日再板の時原出各本元文ある本ハ
尼人ハ写さセるゝ大ハ写誤ゝ[illegible]
磨滅して[illegible]
[illegible]再刻の出入セさる[illegible]
[illegible]東再板[illegible]世文ハ考る人も[illegible]尾
先ハ七部ハ注ヒとして[illegible]
[illegible]も少ス寸[illegible]後の付孔も怪き法外の白
[illegible]ハ[illegible]発て[illegible]再板の[illegible]や

と七部の字形を按ずるよりも寄暖瓢の巳
い同板よりもよく様炭院の三文字よりも
院様より十余年先の作なる去年の板新なる
故なり再版なる巳集皆卦引後世皆板い
皆漢きを紙のなる狭めしい後世の出林ワ
さし能くなるよりも端部よりもあるヒサ あとあて
あり あとあるる功者なるうるを二口さしこる
るの正竹炭俵いまを新流さるい伊賀迷の
茅稿巳刊の集も昔のい大方社中の板ナ
又板木を考くなるよりも巳集と后三集と
刀の用方異なれ矢字之禄の彫方と享保
文文の彫方と刀法違さるをいもいくと法
れい出様も初て移して再板なるを知め
支より京版の店なを愛 ル 四年 を
求めとも只再板の古板ちるおのくまて笠の
京出回き他れも多く宜なるを茅を案

更まの時すく再板を京ずと見て懐き侵よ
注七一夜のすを長い京年い那よ紙屑も孤果
ひし変よおんり巳写法多くむと受るなくた
白法の巳程をもて条考正一本文を出改て卦
の上ハ一を下一注釈ハ〇再板何ヲ何ト法ら
何ハ京出何ハ廃滅セを見るれむと
近ひ長ら長後世巳京ずに出む時弔考
と按入ふい考きとまあやくむと受也
かくる考をずるも皆伝あり伝人の人あい
ずを長ら注朱て後王ら及
懐玉書の義を授す次を去二尺五寸巾寸
七アの釈板及帙板ずと見ぬり氏が義と
伝さる古ずと人皆京
ずと見て孫義ら
矢字えよりえ禄十一
三の万七枚を彫おい

芭蕉翁
俳諧七部集
諸仏堂 懐玉堂 発行
平安書肆

元治元	昭所	
すみきり	建	
すみきり	順	
猿蓑	乾	
ちるこれ	坤	
阿羅野	上	
茶の湯聖	下	
歩られ	負外	
續猿蓑	上	
猿猴三乃	下	
四元年	負亨之吾仙	

数々ある中アケタル八一部ニテモスルおく

あれい外影い文くの板ハ
ある〳〵殊ニ七アニ集一義
役後のコ中あれいかく一枚板の外
数あるし拾分一是に集再板
の時集くるおく武中猿炭続
いえ板の外影を法て彫一と
又え承ニ三おくを晩都の
三いお子ニ入えて出仕ト
さて武中ニ去日の外影ヲ
きい再刻の仰去日ざけを
載文考ニ分子一ニ武ハニ
去日ノ孫負亨三一内刀年
仲秋下院トアル倩ニ

京都堀川御落北町
西村市郎右衛門梓

と入ケり青冠井ニ彫一お
ニ西村の名おくい負亨ト於て

も再板の院之文後天明の末西村役彫一て
安永の小本と偽ニ去日を浪花く板一時
信ヒ文ニ文ヲ出家号ハ名ハ武ハニ吉ヲ
ニ西村の名あるおとあきおあり文時ヲ田も
七アヲ方大板ヲ長ハ分一を更改の比京
備井正ニよりて去日偽ニ再京一ニ変て
後い七アを掛て故く後ニて七寸ニ五寸三アヲ
の板ニ外影とつめ彫一士一老を七老ニ金を
俳諧七部集 支考日いとこ 二
俳諧七部集 炭俵 二
俳諧七部集 猿みの 三
俳諧七部集 ハ猿蓑 四
俳諧七部集 阿羅野 五
俳諧七部集 阿羅野 六
俳諧七部集 阿羅野 負外 七
俳諧七部集 阿羅野 負外 七

俳諧七部集

寛政七年乙卯春三月再刻
皇都書林 筒井庄兵衛梓
浦井德右衛門梓
野田治兵衛行

変改は再刻セ〜おいの外歌帙奥三丁のミ
〜おの外歌再板の怪多る譏あれい又寛永奉
う又書目は阪板あり猶は誤多〜又あ永の
小本は字遠う丈上小本は仮板も三通あ
り或い幽葉金葉袖冊子一葉玉葉ホの合
ホは字誤るおい諸出として行正〜皆外の
上よ人一字を入う却て法の他出はかる字誤
あるおを皆訂正セむと思う美限犯て乃き〜
む時い後人志を翻弱く〜

○古注の評論

一注の後は○印ある已下い写誤と古注の評注
及中大方人の知るる所注にあり○原注 表注
とあるい倶して〜而〜

一法注は再板の写誤も多〜して附今の注
を知〜るおい注は及されい其非とあ等 又
先注の誤を伝〜再奉〜るおい後とおい

二百一云トハ後云ある百ハ悪ト宜るおを後の作者
の眼力より若ト又左世其若ト少古る歌句を対又
多後おく〜ある二句を一云ハすはつけれい百句い
百句かう二句の孔くい皆一云は作るもあるさよく
義の正者ホの中はんい遠の人みて彼出世は
述さるを入るは「おの二句を一句と云て分ちう心る
孫を二句と又て者ニ」ようあと皆モ一義の
左世はさる出を孫おい新撰八百番打三千
おく〜むそを同者ホの中はんい分て張実セ〜
人も多あと乃の一大るちるるはんを使すや
陳おけ〜るもおきなは更歌は固く〜夏
ようは曰「力仙い北六新」て北六変ある
心より云〜二句を二句とセい北五歩とあり
そを北中は五三乃もセい北変も見守か
るむ指付句二句〜は作者みて深情も
亦面〜ある おを却は松山あ等句は花等

あるを丸めて松山の花考と一句まとめるべきこと
平生の子と孫とを孫にて親と子と並て客数も
おれば衣裳も弓〳〵くて〳〵人に笑ひ畑
と同じ意味にて拙き時に実のりかたる
とく年の一つまるべし差二句を一句とする
拙のあるべき他所あり〳〵あるの二字二字は肺
病を存く又いひぬるべしはもの子ら居た
ぬ子の未だ生出て或を翁すとも数万人の
中に一人なるべきといふ不伝
の人こそ熟試或の深を探るべ翁の付味乃
至眼に二三句も一件ある指を見て其変る
所あの人分てきを見て二句三句を表に表
と変の子とれ連ねむ都て付句あるを人ら
一て俗句を分るおあるとあるい居て居句は
変るおを分る子と仏遠あ句より居句
を遅て次くあるかるる或も出来るく

一句奪ハ俗三句を後て字句まて字トハ
あ句〳〵分るん奪ハ居句は本又変るき拙は
前句を作る時はるまて人仏て発句を付おく事
と孫禄は無化の所化をあるを出をさして字
奪自生ハ出ハ人も文より生るれ義句
を又ちるい奪く居句を行ふ与く其作ふん
亦奪ハ千ふんを倉句くおあれい百句百句あら
ちは奪孔ん句くて居ものき老い出来付
又居句は又ふる発ハれ句にすりて付教を
作を声句付ハテ京師へり後云い多日まて
いちく三日のちに大門を表仏。那合ハ比ハ比
すノまて巳ら其い表れとも後居生の居句く
乃ち寺又三日のあ丈居生の句合ハ比ハ五寸
ノ角れい居句〳〵乃ちくされと次に表句の歳と又ふの
句は変化句一を合歳の拙方ハそを考字乎
ハ六すノまて作るあは次ふん何の苦もあく神

軍と記侍さう爰ニ五寸ノ奪の物きゝ
云すゝ奪の字きゝ不ハ奪れ上ニ不用の用の後
も同称ニさる字ニ家ハ達て已ニ変化ニ因
て扇付ヒ一を両用あすやと分れ一時ちゝ与
奪と云て若い程く後い字て両用ニあすと
云沢ニ用ニ用ニ用

一故事面白ク故事を文体に分るを故事に体ハ
平生の事に故事を含て平生体に体ハ又故事を
形容を面白に云ひて分るをいひて故事
は体に熟句を以つくと句体を稍々多くあるよ
分らぬ平生の詞は付まあるに何の故事にて
も分らぬ人句面を平生に和て故事に方
二は直さんきを古注は只何の体にと故事出拠の
こと拠或い古人の事を故きて文体
こと故事とも知ざて平生文を一ひら
てこ実西体と体氏さ長ち実を地語の不ク仮
今能とい和さとい古代のお語を事の人の体
に写さに号る句あるに人名れと文代人のこと
て体の二句ると云ふ文体今句分るも
文この体に多く自ら存ぜ考よ
故句の来方にて百句いる句あるとあるし
ばり人名体に古人の体を事所の人ちつ引るある

を古注はかくにある体を平語と人事語に云故
る上の手つまんに、らに自他遠のひら
てあるに体但事を考は本書に体書よ
譬体方あを体ともするあれとも
千人々子人和るを平をするあるこ八他世平を出一
家の意方を知る付に文を句を
一軽巳こ八お紙の付机をりて事を和連一句
実に多句を文体に体と分ちあるの物を和
さ体と分ちに、和るに故皆体巳の後
えに分句に一句くに文物文体文人文用文
時文就文の六を悪人人なくおるを多句を
居意て居句を業する故に世と云ても
收巳やさるあり今世体の者汲きく
も「お代い体のんあれとも」まとんさ多い
家にを文を付写るおとこ云ちひてワさと
收巳する句を好て分る高き或こ

一後句の惑ヒハ後云い三句無てる時二三の付句を
もて一二の付句を注さる事此ものの一癖之者
あり二三の注はるてい注する句をて二句三句
毋奪之と出行〳〵う是両句の云いと云はるる
は第ゆ一の句(二の句付るんもて云あいさる
まぐるを出来まられる仕ちてる者を只一面ま
又後ゆん抓てとく有よかんるる出来るこ
一誣云ヒハ已ら癖又ようち先注を云出るあ〳〵
是付句い人この扱りていう指も後〳〵あと只
浪る有〳〵付句有て已ろう人ちてて
歳ロもあれ是と宮て付る句は四人の人と
は但する注ある〳〵きらい后人の後矣あ〳〵る
あい指又正の仍屈さる有〳〵は恐い句放る
注云の浩は后後匠ある後学ようう只
るりしか句より拳句ちあ後〳〵は要化を
要る付句ま其宮撥い扨ある扨付句い

おの句の余情と后句とおてはし詩は含てる本を
りて姿をちるおあれいるあるも二通は
後いちれすは今誣云を秀ても其次〳〵は要
通寺氏有は又ち勉句句作の三法て両
句を考ある時い文彩の手拍も一字の仕扱も
後はるるちく明は又句あるあそう
一番ハ ヒハ先注の中其情〳〵其拍の更〳〵更句て
ちく〳〵思うつ〳〵何〳〵の宮〳〵何は何とあ〳〵ちひ
り何〳〵何を云ちう〳〵何を何と云あ〳〵ちり
ちく〳〵る注を付る句〳〵楚門は有るもさ拍は
お為る拍句付い極てあ〳〵を〳〵多〳〵山川
芋木生乱木の系乱仕之の句は其人て其用
モ其情は其乱云モ句中る陽て巡云は宮句
る注は付れを味いる句て付句は付〳〵や〳〵つ
あや〳〵志れあや〳〵は付句は陽りの拍は付ん
い后月扨は拍の句ちて「仕后門の表と言拍

の今云ふと化さんの乃遠人の云出るひ
うたくしけるこいまく変きるの中より北う
去嘉十支考日付白い付るおく今の他話付る
をすーと寺先所の白一白もはきるる寺去来
日付白付る附い付白まあ定今の作去付
るるをを初人のつさの拾て笑て寄て付る白定
世人も赤世乃寺と人のいまむるを而て付る白
を若す初てすく付る白を字一換多寺しい歌
うりて化ょ呂うきたのすや
一言歌只曲長年生の作を実体は範遠る
を外る句之基体の作ちを考ってそを実面
ょ笑て一向今日の拾寺ょ付まあ平寺他話
も初て実るる付まあるい付寺さる実るる
付あ寿該のあるすく又白ある白ある時句の
曲長あれ能てうおちよ
一接記コハ失注の中被育の象を探て説！

てすく何の伏うを付何のるを九合て付る
広成いあ白の表ょ脱る句とお紙の付孔者
られ強て変化せ一注を書むと寿怪の寺
を云続る表或い更乃りとく写白る拾て
さ〜ょ平生ょ例あきるを
る句と基つるいる寿を巧ても天地乃
理ょ付まあるる作すあ白と底白とてし
て更中ょ姿ちさるる付を云寿の姿ょて
僅ある白作ものや次るおて寺おを
含て作るる字法あれ向合性や宣読の
てき付い極てあきるて
一説コハ失注の中寿さりて弱の一説を何
一てく寿いあ白の何とり句ょ伏て付う
寿いあ白の何と何の弟く寿い天人と何と寿
る付くナ、あ白の中乃白字ょ七字ょを
切抜て更一付合る拾あ注を若る句く

蕉門に芭蕉の句を除て集する法いあれども
句の句を除て集するもあり
ゝ去セい其殊さる句を除句とおもひ
時さる中ゝ其殊句とある所さるゝあき
ほく拾ひ其集今世に伝て蕉を
付句するゝ中 今按ずるに
一体ゝ 只付味を又ゝまて学ぶる通ゝ
ゝ去ゝ ゝまゝ付ゝ去ゝ去ゝ かゝる物ゝ句を
翁する所て本二文に高ゝ風姿風情無
に拾ゝ ゝ名ゝ去ゝ句ゝ ゝ去ゝ 拾注翁い祝んの為あれい去ゝ
ゝ去ゝ ゝ去ゝ ゝ去ゝ ゝ去ゝ ゝ去ゝ
ゝ去ゝ ゝ去ゝ ゝ去ゝ ゝ去ゝ ゝ去ゝ
二句注只付れを図て前句の上のゝ注ゝ
と称る句ゝ其句注の中も付るおあるも
挙用て ゝ伝ゝ ゝ只ゝ ゝ去ゝ ゝ只
句注ゝ ゝ去ゝ ゝ去ゝ ゝ去ゝ ゝ去ゝ
ゝ去

るゝ古言の非とゝ[illegible]を注す

熟法の製法を按ずるに[illegible]亞拉門人此余人
の得る血脉お勇ゝキ角素来許云支考のゝ
ゝて文余の人ゝにおゝ文ゆゝるゝ所の一おゝの仍
ゝ手ゝ[illegible]ゝて義のんゝ使すゝ[illegible]ゝて義の西語
を文一人ゝ文余も拙ゝむゝさるゝ文人ゝの已ゝゝ
方ゝゝ義ゝ熟を考ゝゝ[illegible]ゝ仍ゝ[illegible]ゝ文左
熟白作の三法ゝ傳ゝて一時流行の風調と
字とゝゝゝ[illegible]ゝて是文製の原ゝゝむ
[illegible]我邦の他所ゝ求ゆゝゝ我
ゝゝ口ゝゝゝゝむと[illegible]ゝ義ゝ原發ゝ
も地彼を滅ゝゝ[illegible]ゝ邦[illegible]ゝ
ゝる三法ゝゝ文[illegible]ゝ風調の原りゝ仍ゝ義
の口ゝゝを[illegible]ゝ各日ゝゝ[illegible]ゝ風調
[illegible]ゝ義ゝゝゝ得ゝゝゝ血脉お勇の人ゝ
きゝゝゝむ是を世傳ゝ[illegible]ゝ價千金の技術

いゝゝゝて只文人の声色を受ゝるゝゝ似陶と
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ義の面板を文一ゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
人ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ

風雅の伝来あれい僅の古伝も多く伝する故に出
あるべしも所詮む彼釈迦孔子とても文作て及い
教孫子丈孫子及び丈孫より五代を経たる故
に七千余年を写伝するを次くに之を備へ之
を釈して世に伝ふ偽の乃も今に絶りさるに
中比已来の他人へ古を称るるを云見掃して
翁さる人ある時に程迄者と張徒しり称る吾
の二字はいろんはひ見やすくに白敷て我
人の門へんは名を示をもて是非を定るい爰に
爰尺るん地の子や希くい後の君子を
に祖翁の師匠をてし人て直接門人乃
遺出を撰擇へ蕉へ蕉門の再興を企給
まへ祖師の冥助を日夜に祈て芳を今に
ゆる世と寄あひ見る常の祈なり

○冬の部

貞享元甲子乃秋翁東武を立て伊勢に詣人
和山陵近に美濃を経尾張に出給てのち都に
風の始い延宝五の両とより新に俳諧九の次韻を
除りへ第天和三の虚栗に変へ陸奥又一
とせて発句の紀行に変化り俳風潤
易る雅まて千載不朽の基を立給へ世挙て
発集を正風の始と云へ寛に延宝を正風乃始
といへい[系図]去来曰蕉門の俳諧乃元和次句に
改へ名栗に移てより已来去へ変て門
人皆除りに洛せむるを知り時をへん
乃へ翁始て他門を立ぬまて生より行基
とあへむる法の程あるを基より設の
も於林の名誉を拙うむ為へされい延宝天
和の風体い祖翁一世の骨折まて除り中の
世を見を撰擇へて再板へ初へ七部乃

中ニ交くる■□■□模印の白くさて冬日よう之
禄七之の老い衰不易の志変まて不易除
り い梅方のもて新向白作の除りまあくす
風調の除りい時〻朝〻まあてあの除るく
ちく冬日五力位も各矣みくれ矣日さ
新向ま巧を求め白作ま和粉を拾くる処
多〻まふよう撰集い流手をそすへきおく
家俵のときい撰集の巧を抜て只平生の地
ま仕立られい冬日ま比する時い和様を入れ
と志と高巧を手柄とすとの遠ゆて初ん
の目ま虫泥ま入西めれと付れの機実い毫
整も差あ〻共あまは只学者のちとさて
変い付れの楽方之新向白作い已くら除りま
泛て古人の稲を求すれるの状ま他て明るの
人と差ひるまみれ集中都て又立新白作
の三法を以く不を能〻んまとあめくう

冬〻日題号

注釈 一説ま宮柱ふろ吹たくて历の矣い冬の日
あ〻〻秋田あ〻〻乃高氏粗勇ま冬〻る
粗白あれい冬日と以新号も見ようおくうと
いひ又七ア渡ま冬の加乃哀あ〻乃と以ふ
稼ようあ〻ようと以も偽ま非之一部の他
世冬ま変の〻ある新ま冬〻日と付るか
ちむ広ハ〻〻〻

服部鼠と云ふ僕を連て来ること稟白し後は名
古屋に住て医を業とす天下一庸医竹高
と称れをおて扁鵲も者医も及ぬ仕術
を考め病家に至り[illegible]と狂言し[illegible]
竹高お出[illegible]因肺腑めうつ〳〵人の秋孔を不
分と風の杜乃下寄と宣家々の寄を忘
合する世に有ぬる拍又多く哀之仕高い
藪医と云ふ狂名高医と持て法を風狂
し後は狂言の奴と成りぬ翁も他世の奴と
宋する一変不住の旅友は只合て仰る外
と沈しぬる句〳〵ひり 和州琴[illegible]し 平鼠の
ちく嵐く拍のんおく寸ひり

狂句の論

[illegible]狂句の二字に付は狂詩あり寄て狂言あり
他世も狂句おく〳〵やもと狂言士の仕高と峰
出は是は外て此句の拍伺と多く百狂れ

れ其れは是を狂句と云ふ[illegible]れ後に放てか
へきを出続れるに一附のお好し狂句の二字に
句まあ寸狂言を杜冊ちへと除くむを沈分し
てのちく字余の句と仏乃くるに形く杜冊をセ
に其詞を除て百字ぬ有は字余の句も
是に狂句風と続続てい句る風や却て中て
寸只風の名を続て能字句句と白くされ後は
を狂句の二字を除て某も出ひり
▲二八背狂言の方士式図はたとるを[illegible]出て
図中仕方トかへき狂句二字を抜て白改は出続
る世界とされい狂句と続切て風の名をよむ
る句仕くされも出続る有は一部の句は
秀句の聖と出ひり ○巳 乃言古人と詩文
句出も狂言の方士とあり夫は我名の仰る
仏と云弟あれい狂句と沈しおく仕高も狂
言係我も狂句と云風人とする[illegible]あ[illegible]

語法のんは又ておくらはしにハ去ゝとゝる注
紀の詠写ゝ因和句の二字まいゝを日一部の目あて
詩は奏句の句あれい句中の句にハ誣云ゝ

哉の注

▲哉い同岐 読仮云ゝう文る辞ゝ以ゝ ゝるハ即読
仮云の句あれいゝれ哉のたゝひ方ゝ正格ゝ又
ちる楊ゝ ゝく性ゝにおゝにちるゝ楊ゝ ゝく性
ト読仮云ゝう読ゝ辞の字ゝ楊性ゝ仮字を入
ゝる格ゝそちるゝ楊ゝにハちる楊ゝにハちゝ
主ゝ寸ゝと楊ゝ主ゝ寸ゝと仮用の主客関ある
時は用る変格ゝされとも読仮云ゝう ゝ合ゝ
格いゝも遠ゝ寸ゝ以格は合ゝ哉為い落辞
合ゝ仕換句ゝ〇因升云ゝ字ゝ以ゝ読ゝ破て
ゝい格はゝ以ゝ疑ゝ代ゝて名ゝ為ゝ仕ゝ以ゝ
は ゝも誰ゝと換ゝう句ゝは換ゝ時ゝ楊ゝ
疑寸ゝ、仮ゝ疑ゝ為て哉いゝ用ゝ歎辞

ゝるゝ七ゝのゝ五ゝの哉のゝと指ゝは読ゝ中ゝ
云ゝ為ゝの乃乎終ゝ時の疑ゝ又句は疑ゝて
楊は疑ゝ寸ゝ句は換ゝて楊は換ゝ
ありゝい楊ゝの乃ゝちゝよゝるゝ

■ 誰ぞやとちゝる宝の山桑ち 世水

▲句今和句ゝ以て風は吹れゝ傍の寸句は
仮ゝるゝいゝる人と出ゝる仮ゝ乃ゝ貫楊の指を
付ゝう誰やと云ゝる宝のさゝんち山桑ちゝる
要返の下を彼宝ゝておゝる後姿いゝこの
誰ゝ係も仕高は能仮ゝうゝとゝ返て「風の果い
指は仮ゝるゝ老ゝ分ゝ乃ゝも実もゝ
古景を只合ゝちゝるち乃は係ゝ老ゝ乃ゝ
やゝ指ゝ〳〵と云ゝハたゝ云ゝ祝云ゝ句の宝
初ゝたゝ助字の係ゝう仮ゝタチツテトを舌
下剛ゝるゝれゝ云ゝるゝにゝりたゝ云ゝ方係し
家ゝ風ゝちゝち乃の宝上は家て再ゝぶ仮ゝ

かの白い歌れの自白あるを掘る他人を見る拾よ
ちう自白と云て風雅の姿を寸法掘白
業方の正格と掘の付方数体あるゆ由印深
さまあー　○庭訓　むのちくさる宮きて来る拾と
来る花来る略老人ゆとの性ゆつく体をそで
つくとぞくあといふよそちーく完未ゆ上ま
まあるく体上図たそやとトかてちくこはてよ
むん上図ゆちすい何ーまま人のちくふほし宮
まさーゆく山来むの花ん上因風ゆちるさてん
むを雅や花せると外ー拾上モ宮辞の人ちく
□　有明孔主水ま因及造ーせて　後分

▲おゆさんむちくる宮ちゆ寸と宮ある
く人い雅や上河と云ち同き拾と付ちう形明
の主水ま因及造ーせて上モ宮体歌てア宮
きて宮ゆる行お大大ユい何とち風俗人を宮る
清年ゆちん移るみ明の主水あれいト四宮ち

む宮きちうとお無する拾くく昔京ま何果の
主水とトす大内の上株梁あーみ明の弟ま
ん宮ちきあま世挙てみ明の主水とりうとそ
宮い風雅ある株梁とふちの寓云く砥云て
因孔を手巡帆頁ま造ーて上モ門ーさて拾い
むのと宮ゆ白ゆるを人のとちあくるま記体う
拾て付白い付ゆ付い正白ま体て人ちる時い云ゆ
おく　○庭訓　宮ささんむの風拾人の宗ま及ち
みゆ明主水の人ま村ちる体宮上自他連ち
又人位の中尻設を行ゆるも拾ち苦門ーて
人位上六釈九挨と人ぺんくゆるゆあ下深よく
むーゆ付ぺ高い人名ち主水も宮い人人のき方
あれとえ友ぺあれ宮ゆまま拾ちう 庭訓 主水同
の造る因上懐川宮ち田及のみ明とく名因上
因やと拾ふ詩上モ宮接弟ちちう云て才一云
月ゆあるくて苦ちう宮ち主水二字ま迷てかる

傍秘方の白さ因り少きるに薬方の法中孔て後
分白い大抵よ並ぬくおとに浸るなく

□ 改乃高をふるふ赤馬 巻五

▲高有明の白妙ナル豆腐を造セて日出ル勢
に向とえ豆腐造りの抵を分ち改の高をふるふ
赤馬とハよ天より来ふ馬ふるよ門よ並てるをえて
るを造り傍しれとなるおもむの抵をもやす准云
と高るあるてい熱力入ちすく巻清を因造よ
くさり因造るを推い何改因豆造るとを
よいて又左示ふい豆腐あるとなんの古えハ士
あり夫ら因造ふい豆よ法梅あるむ図有明
村とふ所よ豆腐とふ人おて常く上因セー
るあり片さる抵あるく浸ぬさるくて
ちく少くり ○庭訓 茶白の因豆を豆腐に用ル
来るとふるとふい高熱林を快く嚼く抵
て赤るとふるよ家あり共並ぬある上よ造

セて広河もりくくと附よ家ハ何るそ因豆腐よ
因豆造するい抵迂とえて万葉白豆い神よ
まセい赤豆のもるもるふ田井を抵とあ一法ハ伊豆
図西国の但云よ因をのむを弄るよのるとい
高ら豆云の村ハ広モ法る抵条ハ

□ 抵釋の和り高ハ白あるき 杜国

▲高白改の高をふるふ広草村ら起る伴ハ広造
牧の抵ハきを行ふり抵釋の和高の白あきハ
豆皮すを一面よ傘の草くふ旭の白ふれと和高の
茂ふい白もあく地髪毒るるのふそきき抵
○庭訓 一伝よるの白く地の高とふあ一文ふい
因豆と情紙よあるく実い高の葉よ高と付くる時
ハ広ハ俣ハ並ぬく草ふるふ情紙の法あきるあ面
卯保ふ赤一 図 因乳よ和て高巻るてきき
を白とふ和高いひるふるも程やく表やく
日の移豆ぬを白あ一とふり仏見抵姫と

を白まつけて云ひ句と赤まつけて云ふ句くなり
句の位いう〜 垂ら句と付くうはハ一段し

■ 日のちりくまはたて米を刈る　正平

金句句書き号夕書の田畔の尾上丈坊の用
を待うり日のちりくまはまよ米をるハ和歌
きを書まロ人稲りる老の尾を尾れ
風情と忍やる拾ひ国ちりくい日のあくまハむと
する拾米るる西は遠方の方ハ行れ難き
多きくの句とえてす〜 ○注句 白みき尾を
秋央ることえて米刈と付くうはハ拝象之日の
句まり時ハ〜 四角〜ハ時ハてもも秋月
ますハ位ひとあ句まるの拾ひ

□ 我尾い強ちまは病みあくうそ　水

注句 金句日のちりくをまはまよ米る民の幸苦
をハやる仲まえハ丈人を付くうは我尾強ちまは
宿みあくうてハ名の尾まは来るあ〜き

木原の尾まは降き上てあ面の仲を脱て農民
い米の乃も休す他のあまは青を存き脚を絞る
まは我い天下の拾ハと米て徒まは丈米を倉へりと
風雅三昧の人社忍やる拾ひ ▲強ちまは宿みあくハ
ハ風流人の句をし又強ちの尾まは来るあくあ
方の尾みくむ句の姿ハハ以るみくあ ○ア強ちの尾まは
くるを稲刈の仲えるハ白他きくり

■ 恢友まやするを忍くり別の位　義

金句我尾強ちまはへ宿みあくうそ仲ハ心
安く忍メセハ句とえたを意家医くる拾を付くう
強ちの宿ハ木原の尾へ見来るハ立の老尾まは由孫
ある義仲之孫き乃の刊来を語て教風引れ
まと余文みき教を法て法とも医おくま
さまうまは愛生守仲の効を孤てんおく拾を忍
宿ハ何も老尾まは引りまいあ〜かくみるも宿
世の因孫あの強ちの毛相孫るも丈愛の生る

も彩の色と色る拵く○【頭】主人の子分の祖父ハ
承出思ふ字矢て思ふ如く成しをえとりし
式の分の程に詞を入る時に髪せ寺分の程に
やりトいそそいけす志ゝうてい居ゝ付されを
ト七字を只やゝつくゝ作てお居ゝ【世】思ふ今
便おる人を迎ふる再板の法を考ぬ故あれ
と偶るトえてゝ我居に詞と自他遠ふ上ま便
るゝゝ志のふる此テ志のふトハいそ寺【内】茅刈ゝう
三句イセお浩紫平の伊に歌ゝ

■ 仮名ちゝし と乳を後拾 五

▲おる髪切れて志れ女の拵き分の祖を考ふ伊
トえ志」分をかゝろ拵を付ゝう仮のつゝしと乳を後
拾トハ如む人のおよ仮れて矣ある様を矢髪切
ちれてゝ子をある中を引放れ一分の伊出る乳
を後拾ゝつけゝ子を見ひ分を考ひ丈仮人を
恨る拵ゝ是ゝ色ゝ分い拵て時ひおゝちえの鞘

ゝ納てやると伯父中ゝの乳の拵髪寺分に余
拵ゝ丈也【ア】髪きれて引放れ一に志ゝ一○【注】
志い要まゝ丈思ゝ契ゝ人ゝまさ女ゝて丈如保に
きい巳ゝ不ゝく臆おていい初て男のおゝ尼と殊乃
人ゝ殺れて卒ゝ髪利一ゝそい仮ゝと少て今
いにきゝと乳後拾る拵ゝ実の氏位尼の子を俗と
丈てゝ蕉風ゝけす志に挿家ゝ子をある要まゝ
化人の如むゝて丈丈ゝ居す尼ゝおる中世ゝ
あゝむゝや見ゝ俗二百読いおきゝつゝと見ゝと髪
生寺寺利一人と只我ゝ志ゝ人ゝう出ゝ見ゝ

■ 消ぬ卒塔婆ゝまゝごゝとゝく 今

▲おる仮のつゝしと乳を後拾ゝ子を矢て仮の世を
歌ゝく伊【暴】丈ゝ【暴】ゝ矢ゝ子の伊ゝ見ゝ有
ゝとゝまゝすゝごゝくゝと句ゝ【暴】矢ゝ子の伊ゝ見ゝ有
て死も志ゝと見ゝれす時ゝ卒ゝと見ゝ美ゝ美
おゝ服おゝとゝゝくゝ見ゝも消矢ゝ志消ぬ

生を死るうまく知の世話仏のうきるゆゑと母の
世話をそゝうり序 注釈も口〳〵〈家よ人乃
仏の変化を分ち手ものうとうるを扉とみむ

■ 彩法の時人をくく大を焚て 荷

〈おの白粉を裏清めそとそよ喪ヲ喪テきそゝ〳〵
ゆゝラム白と又立又物の拍を分さり新法の時
そゝく大を焚てハ戸稔択様もヤ喪ヒよ歌
く人の彩法を又てゆの家の風の外よ去むゝむと泰
す。仲くにり人人に左にう孝子みゝむ○注釈廊
ちの泡に注釈消めよ彩法の答にモ亜おく

□ 何ろゝいゝ矢よ懐ゝかゝ家 ゑ

〈おの白彩法のクマキクスエスキテ時えそゝく大を焚
てオルハおナキ宿ト又立又人の侵男を分ゝり
立い矢よ情 老家ハ世を又彼家を任彼て
行老ろく会食会は住ろ依ゝ懐性の
ゝき人と乃通の性ゝ拍く彼栗田口を補う怪

しの御戸は住手取答よ素を林火て往来乃
人と乎仏あり〈おに白切ある住院るを奏
のろゝ〳〵ちしけり○再板考えゝ仏ゝ
遠ろる取よ注釈孫ろゆよ浪ゝり 大れお出
薩州の伏に後二白又換の或ゝ

■ 田中ゆる小万ろ柳家る比 今

〈おあの拍手矢よ懐性のよ立ろ生生て家
段家する時ろお束と考よ河ト又立又物
の脳家を分ゝり田中ゆる小万ろ柳家る比よ彦
ゆも柳よ考おゆゝとひ対よ夫木ゆる小万ろ
柳も秋よ逆て保ゝきけれゝ家の家よ
ゝも逆ゝくきゆゆゝに西家ゝよ拍く〈
家よ立の矢する会を考る時に理よ家るゆよ
或会ちしけり会ゆを考よ河ト又る法い
仏氏実よ使む所て用ゆ実てり テゞい
他よ矢ゆる辞拍ゝとゝも他のむ社要よ

持さるをいとりのい敢ぶい卑とんいるい俗
羽ゑ之氏示他の柳ゑ美ゐる振ゞ字ゑく竹
ゑり広り田いセ山田の辺俗俗とゑ示ゑ小方
ら柳ゐイ広り

□ 雲務ゑ舟ひく人いちゑ全ゑ　水

◆ゐ白田中ゐる小方ら柳蔦る比チ紫踏ヲ
体ト又ゑ』見柳ワろき振を付ゑう雲ゑ舟
ひく人いちんをゑトハ新石交の五提ゑ蔦葉
して雲方面ゑ蔦ゑる之踏チりくセく人を又
てちんをひくゑと実ゑ振ゑ〳〵寝ゑて田中
を言俗川と又て小方い寓云ゑゑり○注釈
柳ゑ水辺を付て舟人のちんをゑ〳〵又セと之ゐ
三三白沉ゑれい百を引ゑ仕ゑう広い白注之
えより御三三白沉ゑ俗ゑる白之又いるをゑく
俗ゑとそゐ白ゑ蔦ゐきゑちんを広一つ〳〵きゑ
只柳ゑ水辺の付ゐゑい「雲ゑ舟ひく人の又セと

作てすむ〳〵因小方ら柳いは因田中く沈い俗
川舟の付芳ゑりいセの俗ゐとゑゑ非之広ハ
逐云之俗川添ゑ田中広地ゑい雨

■ 英昏を横ゑ映る月和一　五

◆ゐ白今比人三方クレタ方雲ゑ舟ひく人いちんを全
河と又ゑ』向岸又る振を付ゑうたそれと横ゑ
映る月和一ト三〳〵の月之氏坊い俗川振そ
比人いを戻ゐむ殊きれむの化口ゑ伊示の
ゑ舟も比る登切ゑ今比登るいアノ舟子
ホい宮てちんをの橋ゐむと実ゑ振之横ゑ
映る広河を地口ても男と又セ○国図伸白
広回振ゑ舟ゑり月又る体広モ並ゐ之

○ 隼嶺しき町ゑおりゐる　五

◆ゐ白横ゑ映る月広ヨ言山の中ト又ゑ』病坊の
振と付ゑり俗ゑう町ゑトゐるトハ言振之
言世ゐの奥俗〳〵死ゐて通ゑ人病ゑト

おて言山の寂莫なる多言を訳する拾こ△
ゆ句仿よ寂ラト仿るべきを町よトおるト
作るい次ついト居（より井）の位を付さやむと奪
する付方くかる次へ只文のことを付てい
カかれへ趣向よ移胥すへきおく○注釈さ
うヨ強ト云曲より［ア］脱るとらるされホトるの
様よ出おるを生正ちえ訓ぬよき女中と備
ゥ〜ゥる作ゆ度句の武く

水

■ 二の尼よ近傍の花弦巻く

注釈 若句ト居の尼乃傍さりきの伏登さむ
作トえ点人訪する拾を付より二の尼よ近来
の花の実きくゆれ正和七一福ト居一
尼よ成てすむ正く二箱も赤ト居し尼よ成
て見束れ巳ら宮仕の苦を忘て生活の
むの実いいるよおくトト居て後のる生実ハ
しく見きく拾こ却て宮仕する人のなるを

をして有よ況おるをも又ふて服英おら
をも下居とゆよ又れ位すてもぬふも隠とや
作る句り○［ア］徒ゥる和く二書めのれ妄の尼
よ成て却生辺よおる正く天のの和ト社女中
矢内山のるを向より之る作ゆ拾象之

■ 蝶花蕣

蕣よとれ之り侠ゥむ　蕣
ゆ句度者ヨ見テ二の尼よ近来の花のさり
テ〜ゥきく二伝詞とえ点遠言の拾を付より
隙い蕣すとれり侠ゥむト蕣の尾よすむ二の
尼を雅人の見りて我ゥ〜めを来の花社る
見るよ尼い巳れ正和七一時のる見一とん
乃遠て只ゆ尾の蕣よゥ様をえても年昔
の恋もれてとおゥさ一て隙すりれれ昔
も杜丹を美ゥ一を牛のるゆゥと宮遠るゆ
ゥと合て向一人のをゥ一カる拾こ［テ］オゥりん
牙のおと向ゥ〜おるゆとゥ人する薛ゥてお

柄の上まで付たい人で 仲之の門にいるものは
孫くるまで用れい用之 宮人余の問ふきて
あれへたりと作るり ○注釈 原氏系図 君世
まちかれぬひ宮仕の人も遠き世にあり荒
しを昔ありしく同人は代尼お偕ひとして
涙ふむ仲之ありと向言の付は接象之法
門に向言付は宮法の法にあり 付は常儒
宮に近市り尼のもあり 図 二の尼は見れ
二の尼の家も思ひ下居ふ祖ふく下位れかる
月言の仮も古い荒の様ふ見ても思と同
宮仕の昔を思ふのくと侍ひむ指は 注 尼
のお語きく人は思寂寞 青宮仕七人
社アまトあて我多い様の荒は侍ると定ふ
く拾は 向合宮法之人皆はをりきを
出きるとと詩い荒の清秘を去で冬
日い頑ある集と思ふる所

□ 変おは蓋すく歌撞ある 五
あるるのく社荒の様を拾さてあく人を尼仲
ト尼を尼人のお拾を付ふり始ふは尼すく歌
様あるトは尼迂を除あくの人を尼を出るよ
誓の祈ふ面仲孝延の云ふと尼を尼をお歌
く声の空ふるまけ尼人の人延を歌ある
拾く会ふ歌の問あれい尼用を合て 注 猪
付ふ ○ 注釈 様い荒と言ふる問の只家
ちめ西を上藤と尼撞あるい法声の句は撞
象之様い荒は問はいそ上藤の姿あくむ
□ 今で恨社矢を放川声 分
あるる様あるをよれぬ始るをきよう問ふ
仲ト尼を尼用を付ふり今ぞ恨の矢を放
つ声ト感勢ある大の始るは悪あて撞
る恨の一矢を放つ一念懇さるお拾ふ仏不
徒出刀ふてい様あるは付す 注釈 よろし

[ア]予豊いセ侍の時いセのこゝら悪て射をー
伏に[大]故ゑ該の伏に是ゑ似ゝる伏多ー
○テ声スルとゝ結を舎ゝに求こまゝてい
他ゑ成て付すけぞ い詰ぞおれい結ゝす

■ 盗人の記念社松い吹をゝて　義

◆おゐ今ぞに恨むき人のゑ書像の河ト又
ゝ丈久弥を付ゝゝ盗人の記念の松い吹
おゝてハ恨ある紙を見ゝるゑ紙い敷ゑ逝
去丈栖とゝー松さゝ風のおゝて今い恨ゑ方ゑ
ゝれいゝめて記念のゝ松ゝと矢放てんを所す
い隙慶ゝ伏を引ーゝやとゝをゝー[注約]紙
後ゝに伏に諸の拾ゝ者の恨モ弓モ動されぬな
ゑ丈ゑゝを書ゑゝー い宝法ゑ又記念の松ゝ伏ー
い次ゑゝ出紀おゝ松ト奪ゝむおゝかく仕臣
ゝゝて只丈ゑを付ゝい拾ゝれいをゝゑ立丈
あゝー松いゝ書ゑ村一ゝ隙のゝ辺ゑあゝ

[ア]ゝゝー ○[裏]松地欧おれゝト落ゝ吹い
風の自己をゝれゝ松の自然あれい松の片ハ
吹をゝれトいゝゝい調寸弦ゑ吹ヲ吹ノゝく出
換ゝゝ[注約]矢を扱おゝとゝふゝ吹をゝれゝて
弟の声を答ゝーゝゝに亜扨[注]松い矢を
扱ゝ場乃弟ゝゝゝに伏に[大]おゝ松を付て
弟を故ゑ該の伏ゑ宮てゝゝに挽ゑく

■ 去ゝゝー宗祇の名を付ール　五

◆おゐ記念の松いゝおゝ対て記念の松を名
や伏ゝゝ立丈対する場を付ゝゝ去ゝー宗祇の
久を付ール[注約]墓無の然扱も風像の宗
祇も今い只い久のゝくゝゝるゑ能て逝去いかく乃
ゝゝゝ見ゝ扱を舎ゝと生去必滅の理と説す
る拾ゝゝ[七]ゝの郡上郡山田の法宮拾川の
辺ゑ泉あゝ宗祇の名水ゝ白雪ゝれゝゝ
来世扨白雪社宗祇ゑ古今伝授年て宴

を送あひ詠者也〜古注に〈氏物方何よ
みてかゝふに侍べ家よ倒乃家〜草のみ
枯ナト分あい只丈るを成て拙うむ

□ 笠投てむりまめる北時雨　分

◆あ白新に高れ見力さるり師の新宗祇
の斗義を思ふ伴ト又左笠丈ロさを付さり宝
投てむりまれるく小時雨ト宗祇の世まよ
るもさゝよ時雨の舎ろ子に此を忍やり幸
降てきて時雨まめれずてい白まホの公白
ら出束さとめれでよきさ笠投〜風狂人の拙
注釈 大々さり〜○三 詠もに非之詠もハ強
止云ようある格只巣のもマア に拙の河之

■ 冬枯分て ひとり唐苣　水

◆あ白笠投て中笠もき時雨まに居てエマア
弱ゆるに河と又左笠丈人の用を付さり冬枯
分て独乃苣ハ只一人冬枯の世畑見て苣

つむ人を又て奈人と云方きろいれお母ま
もせめ苣見て面ないと子と居する拙〜○
注釈 居と云ふ苣のまさと見ろ移に恋あ

□ 去〜〜と砕〜〜人の骨ら何　玉

◆あ白冬〜枯中二分て独居ミタル八唐苣カト脆く伴ト
又左笠丈拙の又所あを付さり白こと砕〜〜人の骨
ら何ト八まきあの辺ある白きあを去て差や
骨を繋て枯世加　のあ白ある拙〜あを
自己の独あると天然の独ふを左の伴とち加よ
今一ウ脆あを所守ていろ丈寸団ゲハ捕さるあ
あ〜〜決〜〜ときを決せむとする辞又向ゲる
ハ居り 注釈 冬枯の世孔ゲき伴に〜

■ 烏帽い夫乃玉孔占形　五

◆あ白白こと砕〜〜人の骨ら何ト又左笠丈時の河を付さり白きい人の骨ら
伴ト又左笠丈時の河を付さり白きい人の骨ら
と又上るい原生を隣む侍〜に砕て居る入

る骨かゝていの甲くゝ傳一行徑路のごとく易にもゝれいやきとる庶の骨のうへをゝいの甲あゝ唐土は殷の甲乃形殷を法へゝいの甲あゝ胡亥の占形はようゝじ化あるゝゝを法ゝとおゝ指ゝ指ゝ〈今八云者ゝを云ゝ寺東方ゝて何ゝ名ゝおゝいゝゝゝ写てゝる。「係辭」骨甲占初念の邪ゝ次ゝは姿を生て不ゝる句を空接ゝり因る乃雜廻秦王東方ゝ指て筭佛をあゝ唐寺化ていゝとゝあるあゝ形筭佛のゝ「夫の占と作るもあゝ寺ゝり

○「注釈」骨里てゝる占我物ゝ乃恨る人の出るゝを占もむと何ゝと稱ゝおゝを上ゝるにゝゝいゝの甲あれい胡亥の占とゝあゝおゝ寺ゝ今の用ゝゝ寺ゝ依何をゝて占もむとあゝゝゝる件ゝ未詳の場ゝゝ

■ 哀さの詩も作ゝ時ゝ

ゝゝ句ゝゝの閑ゝ占ゝ夫ゝゝよ何恨する人の我刃を占ゝ件ゝゝ寺ゝ上ゝ出ゝを行ゝ哀さの詩も作ゝ時ゝ何ゝ名ゝ傳恨する荒得ゝゝいゝの甲とゝて昔秦王の筭伐化て成ゝ美あれゝ占ゝゝゝゝもむとゝゝゝゝ習ゝ

の一声を出ゝゝゝ「杜能初鳴時先図者遇別雖悲「格物法」ゝゝ謝豹思帰樂」「夏史」ゝゝ不如歸」古詩古詩ゝゝゝゝゝり哀ゝゝゝゝゝ

■ 秋水一斗漏尽寸秋　蕉

◆蕉句も、余白哀さの寄すもよく一時も時
多き時を問ふて尽其次の句を付くり秋水
一斗漏尽寸秋とは水時走り漏る時刻を
も時を待ども明あかるそちい窓あるあれ
き哀ある付も仮る者あれ人の哀も知て
やめて一声ばんあく〳〵きとちきあ待侘の恨
いよ拾く〳〵反歌をつく〳〵きとちく待一件を少
なむと秋を付きを入し時を言程いと拾を
又ちるいきり〜[テ]ぞハえゾレと者て使さり
年女人の口ふあるを其後の涙を戻を
る句を使るい我ろ言を句んさやしわ
こにり○[密注]逐字は逐次の意苦さり

■ 日本乃李白ら坊は月を入て　五

◆蕉句秋水一斗漏尽寸秋とは秀句と入を
配水一斗漏尽寸拾と付くり日本の李白

ら坊は月を入てとハ李白一斗詩百篇の吹友逆
葉て名月の付仕ら一拾天香の子孫の逆付く
[門]大方さ〜[成]まる堂家集丈山の付仕事を見
る六言六句先尋日東李杜・静対中華
仙顔・山鳥啼長松樹・野客入老梅関・
詩興猶何処母・泉石前翠微間・[序]○
[注解]或説は石川丈山とい〜とも名をさるめ
ゴくんを宮つる云狭しに証云

■ 巾は木槿をそさむ孤屋おち　兮

◆蕉句李白ら坊の月入砧前狂客の唐名な
めてく拾載する侍とは其貝ひさを付くり巾種
をそさ小ひそおとハいきや主ら唐名ゆ〜客
も亦敬向をとふの舎は自作拾乗るひそ
おの何葉ら南史術の風ろ爲を茂は是は
下を恒の槿を拾きて何と角めきくりやと孤
把浮ゆく寸拾書平一の世音を国東故ら伊

陽真天人箱帽著紅蓮花[注釈]

(戸)ひそ浮て空を飛と說する人は蓮花一日の
只遠因一出よひそ打い藏人を彼て盛衰記
四ひそ一面をかき居て撥をれ法を打ぬ「
とあるいひくるをうるもいふ月又の唐人藏
人の何用あるや浦ふ人ひそを入る時「ひそ
いの何系打ぬ」お拍写ーナト、造る事を打ト
者ようり又ひく人をひそ打ヒそ浮ヒそ
ぬ三弦浮のてく後世ともあおれいと又
ひそ打ヨ只藏人と名ふい飲也モ風流モ同
拍よ人浮ぬ故ぬむ盛衰記の文もひそ打よ
続さるを人よ宴い李白ト批把打の対る
そ市ヨ槌を狭ひそひくトシテハ知らを云へ

■ 牛の沓吊ふ苔のタ[illegible]れよ 義

◆おる市ヨ槌さるひそ打の人まそれて怪九の
宮へ沓る侍ト人を人の弱さる拍を付ふり牛の

沓吊ふ苔のタ言ヨトハ関ちの牛仏狗きむと聚系
する紐徬人の儀社浮九宮へ口ハ拙沓る拍宮を
又ふりてアハ号ハ牛仏ハ系で聚你き
人やの徒く世ヨ月受へき者ふるハ拍お歌
く拍ふ[蒙花五]婦万書二年関ちヨ孫勒事作
しハ奇ーき牛出て多くの材を独写れイ門系
の人ハ牛を倩て書をむとする拍の義ヨ我ハ迦葉
仏ふハちの書をちさをむと達ハするヨそあれ
ハ人いうてきふきと形つる敷ふハ史作く
牛仏狗すむと人形ふイ又西の系社事の義ヨも
迦葉如来南但槃法仏薄陰南ハ結孫と
そ又へふれい牛のハ形を重セて六月ニ「それ
服入むとふるヨ丈日ハ牛ハ事を人ハ之の示
ヨ殉て死ヨふり是迦葉仏の日あれい哀ヨめ
てくきハ入服く拍て丈示ヨ怪て念仏ーて
セるくヨ理仏供書ふイ今ハちの孫勒

供者ちかれおこしけるもあり草を拔くもあ
て糸りる中に糸ゐ人おとなりあり文ようて草の
きうやおとぞ宮りるたり以又ようて草の
夕雪ト作て樓に対ふ〻ようて悔九い万雪ようる
を余雪に屋れい文財宮ゐりむ牛の信い関
ち門内にあり文左に関法れ悔九宮あり
〔庆〕八月二十八日葉雪ゐ赤の日に対い牛仏を
野葉の中にひを街の月立るい悔九宮おとく
泊る人と一物ち対応並おく又カセラ仏い釈
世ようる去仏おるを釈世の子カセラ雪赤
ト医ゆり〔庄翁〕或人の翁に大人の祝吊に比を法師
葉て釈字する仲とりて浪くしひを折い悔雪社
宮に長社長人て杜丹む宵相に似て牛の
祝を雪一家拔れし文牛ク人の高と矣一を
吊に拾く又大和お語「我雪一子をくー
ゆ泊れむ芋に屋ろく宮の春に仏仏も

あイ仏も侯に逐中の号浪く

■ 貧に雑乃奚をいてき　ゐ

〔庄翁〕ある原い病て牛多く死を義に保案
て供者する仲と左に村民文彩を拔る拾を
付ようり宮に雑の奚を載きに文浦の侯
人各一貫ツ奚お家て供仏拾伯の彩と
して文曾を寄拾くり▲房お久拔村の伯目
彼辺ち社の部化を綱ゐ中くれむ時ゐるい仏
ちの仏彩仏宮の仏代とておに侯て文彩を
雪附守又大猫の時い仏ちとゐ幟を舟に
ち伯せ人宮沼て刑この奚を黄旦侯に上
文幟とちおく時い奚黄一麦に亜狐て
黄ゐ宮り宮に雑時奈ゐ多くゐる拾
あれと沒く奪する尾雑ゐ ○園敷一宮ゐ
り〔庄翁〕牛の祝吊ゐ人もあり夕雪ち言奈る人
もおと世の拾を沖ゐる訳お宮の陰傍対

の注に云ふ傍付あれい家い正面は供者の用
と付るるい宝法あるそ国宝の八名の仿は
ア牛茂く死故は已後死如兄は矣を牛乃
は恒て和る拾は因牛い牲はするおあれいるの代
も生熟は傍と云てそう広モ考接象、
□ 我行的方の男乃子むへく 全
国云ふ子の代の倚お載て天はさるみする体ト
又は其兄を述てう我行的方の男乃子む
べくトハ国去を司て東方まうる木曜星
みしむ乃倚を行るは生みれい立てよき一子を
ひむと表と拾はり 庭訓もよ 国へーハ其拾
を生ていふ河と去ちあるもつのわりにへーと
いは及寸人いそそまあてふまーきそ
ある附は行る詩く倚云いむはちーとるいま
ひあむのちるつさ於あると生てり六河之
きると人はいくセーと跳る河又へうたと

陪る河は用るい陪くひり
■ ひふも妹乃眉出はもき 水
■ある我行的方の男乃子むへくトおはれて乃体
トは其兄弟続の拾を付てひふい妹の眉出より
トハ時るい伯父の大納言は昇りひふい妹の大内
へはるとて眉出はもき明くい伯くと比比い上の比
笑く一門の内孝続兵家堂乃き我分も
生付て宝て四流をやと手むと他の弁はつ
りて分の上を見やる拾く ○ 訓 妨いるを天は
わてんを存くは妹いさやる孫もあくて眉う
きはもきと付てう 庭訓 妹妹門四流はある
中は妨い君の四流を乃きて妹の家を奪はむ
とおるは妹い来世人乃くく伯乃乳あくは其
弟家あれい眉出はあくを妹のかく乃は拾は
ア妨妹はあれ妹を女のあんの乃きれい眉
もひくはと乃ーはり体は国侯の強敵の眉

を重てやし侍にも皆接系く

■ 後一至す系ひ之系の也て　五

▲ある時用ヰ仕ひテ侍ふ縁の眉出より白と不貴
用を付う後一至居ひ之ちのむ麻てハ已ら
新ひ麻を麻仕て美ある曹るまある妹の
眉出まりてふ伊氣と用しあと性守
指の逆付く出仮ひ禁い仕丁の用れと麻
い母友の役く因居ひい答あき梅ふろく梅むを
老て者を接ー麻也て仮入る志らの内祖
の指く初二至と作ると結と七ー作く広り
○裏居ひ仮石付ふる形く国鬼眉出まやく
とりまう麻と付う麻と結う引くる後の
美希まきのむ仮ふ梅ふ指に門美客あと
て後仕人あとも眉出や風ひも志る作に
同産物の腰ひ皆皆接系く

□ 扉下い麻乃新作ふ也　五

美白花麻て皆丁寧振ま時移る作ト不全
丈物の指を付う扉下い麻の新作ふく
ト八ひ麻麻の扉下一麻の麻社夕日斜ま
新さ付を接てアし日も頃ふ多くせまと
ひふ指く出物志のむを接て客ひてあの居
ひする大時仮出辺の富家く同也向の指を麻
る縁く出方のひま指合ぬひるまの届ぬ彼
方にある指を出をする向ふて丈向の指と也とふ
い必丈向の指ま能て出方のひま遠ふ出ある麻
と皆 ○陸奥扉下の志きま麻のむをあちひ
新作ふと作ふ出日の麻ある作月出麻参
皆並おく国を作ふ出の誣云く

ふとも性ま未麻をふるます
初宮社ま也も袴ふて居る　ま水
陸奥ふ出のまく振衣千仮同濯足万里流

と云の侍る遍歴て月ちるよ生涯を生まむ
と詠くよ歟とも未友禅を抜ひすして今
まの方も禅ゑて脚るよと和歌すち拾くに
名所 世水名古屋大和町俗称伝伯ちより
来ちあると和ひむ○[表注]切字の法皆悲しコハ
俗ゑ千二哉歟之答ちり俗ゑ上せハちき拾あれと
更ちて古くまも歟を孫くすり今まも至を菓
きたは歌ちり寸白面ゑ云ちて平白とちる
あゑひきと云余ちり

■ ちるよ又又る 歟と歟乃 吸 杜因

内方白昭の和ちを碓て泊麦の士乃病ゑ陶ちる
体ゑたち艾情の拾を付ちり ちるよ又又る歟歟
の吸ゑ歟吸くひて小庭の草の蒜の白蒜を付
け暖みるを又て世の拾を効ゑ比て歟ゑる拾
くちり○[表注]まくき未のんゑ説ちり ソノ ま
も白白へをていふあと更ゑて ま中蒜を又る

やちて石も吹ゑ寸れ方ちと南ゑて遠あり
コハ少みる俳肉い為ちみるゑ俳南の秋方を
ちるみて方白めみるを又て方ゑスとち拾之
□ 世ちを果ちと見る俳の和根を刺て 義
白方和方蓼ゑ又る歟歟の底凡吸ゑ和と
又ちと世あの会常歌起を付ちり世ちを果ちを見る
俳社和根ゑて吸俳ちる蓼ゑ世ちを果の凋
ちるを見る俳を又て又宴ゑも社蒜あり又
人い死て方ゑ俳凡俳和ゑてちき世ゑ吹ふと
歟やち拾を表ゑれい合て作ちり[注]まで八頃方の
及ぬ下ゑ根を方ていゑ方之口宴ちる根ゑ方ゑ
ちいれ寸ちり仕俳も方世を見ゑい宴ゑれと
見ま寸き蓼ゑれいを字ちるく叶ちり ○国綱
おめくと方生ちる俳の為吸ゑ寸世ちを果ゑて
見ちんきちゑと脚ちる吸先の作ゑ国蒜を考
秋と又て和痛ちる俳を付ちりゑも並ゑ因槿

花発飯室秋蟲入文門と付は接系
く文門の件ゝこまあゝや

□ 鼓くれれと年ひきり 花鳥

▲おのみ家を見る時の相おうる荒野と天
古文抄のをと付う 鼓き敗れと年ひきあく
よ者上のをを付く 鼓蒙をまあゝかる
ゝ家て多ゝむいそ敗れと年逝西
く拾く 庭訓 おを除なのをとて山を付
さう 毛ゝ ○変い自分の秋左侍あれ
き。ゝ改さ 門 時を入て無変ゝ叩家
ゝきに和れい鼓ゝかやセむと丈ゝ人西は
悲くまゝう 鼓ゝ年ゝ出さる人こ

■ 森ゝ月神ゝ鞨鼓を叩すら 門 文公

▲おのみ鼓敗れと言ケサケ年ひき西ゝ侍ゝ天
三ゝさる歌を付う 広宮ゝ月 神ゝ鞨鼓
をゝ寸せゝ 鼓ゝ年ゝ出さる侍さん合ぬ人

の月天ゝ出て鞨鼓おゝて道をする年を
天文をて無ゝと云ゝ彼方れて鼓ゝ年
むと云て侍ゝて侍ゝ日比庭頭蘭お如の
中侍ある左右の鼓侍ゝむとさう 但ゝ神侍
両をのまゝ ○ちむは推家美後はゝ寸也ゝ改
てう 玉 仲広宮を明おの庫は送出 仮は接
系 門 ゝ年ゝ出さる人ゝ月天ゝ出て鞨鼓て
ゝ叩寸敗家をゝむと神ゝ色さう 庭訓 鼓
時侍ゝ多ゝ出る侍侍寸今彩ゝ名ゝ
ゝ秋の日敗ゝ出て神ゝ月ゝ寸拾毛月ゝ字
不然ゝ侍ゝ敗ゝ年ゝむと西ゝ人の鞨鼓ゝへ
きや広宮は広宮ゝ月を付西ゝ鼓ゝ年の侍
月天の出をとり遠て拾明おるおを

□ 桃花を色をる矢倍の宮 正平

玉 おの広宮は去改九のお庭の侍ゝ天ゝ庭訓の歌
おを付う桃むをまをる矢倍の宮は仮系洛

かゝる五穀を植て留考よ考ふり桃、
苟菜〳〵桃〳〵落の九月くさい桃実の枝より
▲或ハカワコをお或い桃むを枯して月よ祝祭
をえて松永陸正の孫祖みて世祭人とえる
勢盛あるいと忘やる拾く因田楽法法「明皇
弄羯鼓桃杏皆発酉陽雑俎羯鼓之音
獨太簇之一韻也」桃を枝をもて力コよ桃と
分ふり忘モふ〳〵　○注釈　桃と張〳〵矢徳の古事
を白ちふり忘ア矢徳むの中号を載〳〵を
比て桃むを拾ると作ふり忘ち拾ふ
■　西載る陶香の田撰掘種　丞
▲茅白桃むを拾ふて忘ア矢徳の風雅の家
よ富る作ふ之苑の九月の桃を分ふり西
載る陶の田撰掘種て矢徳声を乗むし
と自ふ拾ふ教之矢徳の桃ふる桃の逆分く
ア忘ハ陸奥の人より焼りし勇人あくむろ

ゝ種むを田撰とゝ他人の家ハり○注釈西肥
る忘淑く忘ハ伏辺の玄蒐水載てとく西載る
沼忘伯く又千賀の陸窮を移〳〵或い井まの性
を九よモ〳〵大宏の教忘モ富人欠換く
■　奥のきさ〳〵記を兵法よふく　水
▲茅白陶の田撰を種て後又奥の伏蒙〳〵作之
艾載を分ふり奥の世月を兵法よふく〳〵実
方中ふの計考を中て〳〵比物のい〳〵艾国
の田撰い教よふく〳〵教の我夫艾乃は果ふ
とゝふお稗変の世ふる今〳〵記念の田撰の
ふく考も中〳〵候の撰くと小の方社彩〳〵
伏れく天実方教伏奥の任て下る比五
月考を考で放ふられい陶の沼のむろく
州てふけと教〳〵教ふる伏て去保之正月比
むろと果〳〵実方の小方ふとの陶ちと宝て
彩〳〵拾を分ふり注釈西肥ふ安て

聞よ語れあり〻者て門るの先ゑよ下地の
るゝ情れと宗西くんより　○注釈田懸とる
物の二月の末よ怪菊てゐく拾ハ一段く奥物
ゝ田懸え就て物く者あゝしや国田懸の二
月の空をあくを忘もて人情よ移一奥のゆを
忘出てあく人を付ゝ所ハ白ちぬ之ゆく天正月
の死を月ト作ゝるれ拾ハ三月の末よ田懸ハ二
三月の末あれ　む月トする時ハ季節ハ付ゝ云
季戻よあるあよ月トするハ白ハ古式乃
然し花乃ハ季戻季節の花あるゝ時ハ印ハ
よ季ゝ一寅ハ正月の末ハ二月よ季ゝ
おとゝ人よ田懸も人ゝ情れの寅ゝあれハ

「　床文て語狐ハいとこゝある男　ち

◆ある日只ハよあゝ所ニ人お伏物ゝの年ハ
ゝ拾ハ絶て後者てゝる人を付ゝ一人ゆ
語ゝよ語方ある男ハ宮陣ハ奥物ゆ

とゝ拾女の名を床ゝ女人の通ゝよ以方ハ
情き玉花の伊国いゝとお約語ゝよ依ハ医方
あゝゝそちゝ玉を出一女ゆ月ゝ芳ゆゝ苦
男のゆ五ゝよ語続て只ハよあく拾の逆付く
世在大方ゝ　○れも八タニヨハテタカラのん
しハ白語れハ医方ある男がシタと安ていゝ云
遠ゝ都てゝるゝよ怪ゝむよ倶するハ古より
のゝく彼能ハれハ恭むさく白も尽ゝさく
又ぬ一修寺と云ゝ孝ゝ叶ゆ河とあるを
忘ゝく文の上ゝ改ゝきゝく

■　孫殿乃うゝみ粥り一　義

◆ある医方ゝ少て拾女の見ゝ歌く体ト又ゝ往
る信ゝ付ゝ拾医方と約ゝ一ゝ物き付の云
号あゝゝ女山祇あ御ゝて六廓ゝ為と
沈ゝと今ゝ世ゝあき者ゝ忘ゝ月ゝて
升ゝ寺寅ゝ巳ゝて寺ゝ能て今ゝ他

人のあるを孫勝ちされ眼指する指くゝ医者ト
孫勝の眼ト対して盗れしるゆく代なよ。ト
る去を作くり寄を盗て表ゝ正面の男を
付て注ゆるあるを夫を能てのつゆを付くり
テ是を人を婦れて盗さし中とえくり。ト
女のんの内を又する指れいく付くり出り
○注釈 旨の契の未社松山も医者と少て変女
と成る多を孫て作られぬ中と成りを眼る指は
八指あゝ医者を何の孫あゝし医者のあを
孫勝られしるを出て眼る指は人遠し
内 不娶同姓とゝ法を勝られし指は他人
の振を法注皆勝字を医者帝る
あゝよ代彩て

■ 口をて痛をちきる力あき 水

ある孫勝ト孫勝彼後を一時の何ト
又を又由を付くり八株の注を指を眼め

方より丈男を又を主る疾を彼後
れ株も仍て代むすゝあき出ゆるを代男
も是性のるあれと仲人のまお恭切あれい
行を痛を抜てそうと代て一を念抜を
と役者のを仍て実おする指く○医眼字
口痛字を実を後る指を新く テと下思テ
を含り毛涙之実い言テのんい思テのんく

□ 明白を歌て代セむ 五

ある痛を口痛るい西人の後をいとゝ男士ト又
を死是性の指を付くり明るい歌を代セむト
八方戦の術を首を代て和を乞体を開て
民を助る是性抜る能てもや歌方の
鼠学ま代その痛を解むも死後の孤く
とえを作む士の気地を付くり代を後き何あ
る付く又一位後を付る要代の法く表変
を殺く角おむとを初て医れ株む 法注 九

■ 小三たちは面とゝゝゼ一ツ祝ひ　翁

▲おの〻明らい歌よそ猶るよ拵て遣云の仲ト又左
衛の富を付さり式技の我君に早の極る不
きい我首を狙て勢和をとむと一ツよ小三を
招き方一は成人の後を戒むよ強る家のよ
も遣云ーて君のよ方をゝゝ時を待て家
上ちゝと面を勧て一さ（四）かゝたるい大丈夫乃
お拵く〳〵楠ら楊井のおを云合て盛あく面
と初め一曲をあすい後拵ある完期くゝゝ
殘へかくる佐あくて竹ちす　○（陸正）小三たを
ゝ姫の小性と又くるいあの孰ゝく法に
さゝ面小丈よ面さて祝夫乃あむや

（浮世）者の乃盛の歌よゝ猶の云仰する拵ハ
拵ゝくあを拵ゝと又くる付い在ゝゝ

□ 月い遅ゝれ杜丹盗人　翁

▲あの小三たよ乃すめ殺ゝ字歌ゝする仲

又ゝ貴用を付ゝゝ月い遅ゝれ杜丹盗人ハつさ
やゝゝさるゝのむを盗ゝし月ゝゝ〳〵あゝ
あゝ歌ゝる拵ゝ河ゝ　○（陸）ゝを日比盗
ゝむと時を待ゝよ今ゝ乃ゝて乱菊大臣あ氏彩
ゝ盗ゝむ月遅ゝれと又ゝ情ハ自他遠ゝ（陸）
他の杜丹を盗ゝあゝゝあゝで我私義のむを
盗ゝゝ乱む歌拵の仲乃吹命〳〵盗人ゝゝ拵ハ
他のむを盗ゝい不律ゝ乃ゝん〳〵発〳〵歌ゝ（陸）
花盗人を磨ぬむゝのんハ丈ゝ

■ 縄羽のかぐりい拵れ強ゝて　五

▲あの月い遅ゝれゝて杜丹盗人ハ中ゝ
歌ゝゝ河ゝ又ゝ不用ゝあ。囲を付ゝゝ孤
羽のかぐりい彼強ゝ乃ゝて八ハ全ゝ乃大ハ
往園の西陵ゝを
ゝ羽も彼れ強も
宅明て夜の杜丹乃

天ゆを取て花瓶へ生ける時と成て意
△あの杜丹い咲ゆれ家ゴて花の姿をちるゆ
宝法く紙洞い奥と生きする奥目の乃
二尺もあり文古き不用おと一ゆ並ま絞迄
て押付ゆてとぢ強ゆ生ゆ高ゆ手カリ
も洞の方く ○絵 鞠坊辺の杜丹く盗人乃
なるゆ生ゆい彼強ゆ高と作ゆ生ゆ口カリの
侍遠く鞠の生ゆ紙洞あむや 注 只坊
分く杜丹い留ゆ芽ゆ芽ゆ之い金ゆ分ひと
あゆ乃生ゆ分ゆい変化ゆ並おく

■ 古法くとのく地義きる町 今
表白紙洞彼ゆ嚴強ゆ侯係町の家並ゆ天
立洞立坊の指ゆ分くゆ生ゆ生ゆとのく地義
きる町ゆ侯人穴ゆ石屋ゆ生ゆ石屋い
表ゆ洞立坊ゆ往ゆ居宅ゆすれい家ゆ表
ゆ彼強ゆあり△家ゆ家ゆ侯人ゆ表白ゆ

作ゆ乃い石屋ゆ分くゆ生ゆい新向の文又地義ゆ作ゆ
い白作の法く 注 のゆい作のバカリく雅のだうと
ゆ遠へりのしい文ゆの一ゆ法く示ゆきく
用くゆゆゆくく相ゆ生ゆおゆ生ゆ作ゆ
はゆくくゆゆくくくの仏ゆ ○絵 鞠ゆある
大ち門表の石屋町ゆ立ゆ 注 強ゆ高坊
町間ゆ石屋ゆ 作ゆ並おく

■ 初花の世くゆ姫のいろめく 玉
絵表白地義きる中子供の表作る作ゆ又立
文坊欲ゆ分ゆ作ゆ代町い通ゆ乃れい戸屋の
ち止て表作ゆ生ゆ作ゆ生ゆ生ゆ生ゆ乃
通ゆ生ゆて生ゆ子ゆ生ゆ表ゆ作ゆ欲ゆ作ゆ子ゆ
姫 注 表ゆ欲ゆ作ゆ生ゆ死二ツの中ゆ生ゆ生ゆ
生ゆ彫ゆ我ゆ乃ゆ生ゆ生ゆ変ゆ世ゆ欲ゆ
指ゆ作ゆ 注 世ゆ生ゆ世ゆ生ゆ世ゆ生ゆ世ゆ生ゆ
世ゆ生ゆ世ゆ生ゆ世ゆ生ゆ世ゆ生ゆ世ゆ生ゆ

図花の世とて紅形を形衣装を飾いあるまま
母すらも美の素性をくゝ地形をあるおこと
紅形白粉の訳は自他遠く匿名町屋人
の年より月ちる嫁を又出さり初むの世とん
之比嫁する女の五て他の衣裳いあく人もあ
りよ形くる情きわくと御詠の付は一段くさ
らおい何町ちもよりむ財は使人の作い
▶美之丁を作山手嫁人を通る作くおを余
高くれいもでよれあり
■未れいくらの素をかそもき　水
▶おる初むの世形よりあり時切き嫁の素人
て又立又初人の何を付ちり未れいくらの素そ
かそもきよ未未八髪ある嫁男のまい成つで
かそもしと咲す振コハ新ちり者素あく
下ろふ接中の片れく髪の戸角る形ちり行
列の灰形をいあり振くく嫁ヲ振ト又るかま

未れと□係て付ちり　○図屋人のまいまれ
とて嫁ヲ成又振又未くちれる未は我未ち
若男る使ちむと又比て時む振は注図他八
ちありを又て我嫁も成ちの素を立て嫁と
あるやく寝む振は図嫁ヲ付使未れを等る
振は時立おく▶嫁人又ちる未を嫁の等る
振は接ちく手笑い佐セる者振れも正係
まちまは いちく殺いぞトちれいトいちもド
トセちこのるのめと形く寸
■根形ち解居る国の不形ちる　八ウ
▶おの白振ホの未は客の手向体ト全又傷の
振と付ちり我ちと手ちと又振の内に来る付合
客と又情ちを又の弱素ちむ森完てあちり
ちと又る後解作る後ちの辺ちる門の彩
反ちるちの未れを表七寸ちて客の弱くと
又て大入ちセる事内ちと形ちむと形ちくそ

中ばしをちらして或は[illegible]なるそと見るべく蔓のこ
みゝ〳〵文[illegible]後る後の多く年数を経て因縁
[illegible]の中に雨を宿し枝〳〵に十五字を連ね
の時を入るべし ○[illegible]未だ入り頭髄の肌
脈化紙[illegible]や[illegible]体に[illegible]頭髄の周囲に枝
[illegible]浅い[illegible]女の[illegible]家に[illegible]未だ[illegible]ふ[illegible]
の後[illegible]体と付くべ[illegible]は[illegible]亜[illegible]おの白の
向河[illegible]の反[illegible]るよいよ[illegible]

□ 号記[illegible]紙燭灯[illegible]て 翁

[illegible]の国反[illegible]る[illegible]頭髄[illegible]体[illegible]
反[illegible]反[illegible]の用を付[illegible]号記[illegible]
紙燭灯[illegible]は同紙燭灯[illegible]
次[illegible]この号[illegible]灯向て[illegible]
[illegible]号[illegible]起て初[illegible]毎[illegible]
[illegible]反[illegible]文[illegible]
[illegible]よ[illegible]向の[illegible]

て見[illegible]の[illegible]
[illegible] ○[illegible]字[illegible]
[illegible]は紙燭灯[illegible]
[illegible]未[illegible]
[illegible]文[illegible]
[illegible]

□ 藤[illegible]く[illegible]の[illegible]

[illegible]藤[illegible]紙燭[illegible]
[illegible]反[illegible]
[illegible]は[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]の

対戸形相手のもの一戸先を小戸えて老僧
者皿氏嫁聖氏号て尋ね去あれども
家い指よ殊なる指を筆よ清れい夏之 紹注紹
号をそ物とて熟稽承し一あるる著殊なる指
氏求へ夕ち ▽ 拔高る高よ稼氏いり

■ 三法うゝむ不破の関人　五

◆ある物の名を出るこの書の藤伊き吉作ト又左
伊き歴を付う三法うゝむ不破の関人ハ関
物の辺よ伯さる様客の伊名書を筆て三法ひう
むとまとふとて関人と呼るハ其方の価高と
○紹藤伊きを不破の関と又さう様義去の
切き拔きと伊あき清て関人全三法学ゼひと
見くゝ出途あよ三法拔きひうひとやハ
氏指あく三法あき三法作の拔すさや 注紹
不破関い雅地あれ寒き基ものきと三法
とい他計のそうゝ氏一句 注ア 不破の関人の

伊きよ不凡雅の高人伯合正人の余ひ辺よ
三味いあんうと見る指氏も時関学の惑く関
あて代い来三法あきとうゝ武云あるとあれて
□ 乃孫実氏で打る基とある 義
◆ある関あて三法うゝむ氏儀の三法よ俗され
て匠義出寄人ト又ち指を絡する指を付くうり
乃孫このて打る基を高るよハ乃ちち寄る伯
て面白うあ基を打ゝ完伊を拔いたてのけ
今ちハ代所ひ一献吸むとひと金伊の寄る之よ無
を俗す絡拔する基打みとみの拔ものを友とする
人拔ト又出うり ○紹三法びも法ハいセう
氏一ものと又生ゝ歩りあゝ基ちて又る指く
氏指あ生ゝ歩りト対法 実名寄紹三法うり
人と寄ハ氏云て寄んよ人あ人い基の拔を
うと基を云三法の伊をさうと三法もうゝ
体氏指あくさる実あき先て基き付あ

三法のひろへきや【注】老のおもひ後日恐し

□ 康吳〳〵計さて七十　五

【注】あるひ乳信矢て おゝ長を云ゝ仲ゝ又ち老
の歌を付う 康吳〳〵の信も七十ゝ康れ
ぬ信ゝ猪夜の手を事ゝ又ても文ゝ手書の
ゝ出されぬゝ能て美き時ゝ忘れて七十古束
帯くゝ記さてもと寄する おくち　○【注】

いう子美ても歩みゝ美きゝ歩いるま
きゝと鶴く指ゝ乃強ゝ歩くゝ忘ゝ知
　五

□ 年加めゝ門ゝ年ゝ英金おゝ春し

【注】あるゝ手又乳ゝ下ゝ忘ゝ康吳〳〵の信も七十ゝ
問ゝ又ち又人の力業を付う年加めゝ年
ゝ英金おゝ春ゝ美き歌方の信て京糸
ちしと立ゝ問指ゝ歩きても歌ゝ男て昔
ゝ変〳〵指ゝ指て 初る指く人吳ゝ書き人を
遠老人ゝ歌信ゝ文 おく　○【注】老を世語ゝ又〳〵

りゝ後日或【注】金張を供者する人を又て
秋ゝ十ゝ乃〳〵ゝ後世も孫ゝ悲恨する信ゝ
ゝ挽金ゝ年吳〳〵ゝ歌〳〵の問いるまゝ
　七

□ 一つの金年孫ゝ下年りさす　六

【注】あるゝ英金おゝ春ゝ余ゝ歌ゝ引合ぬゝと
吳ゝ仲ゝ又ち孫文又る指ゝ付う山年加美
地の占ちて金おゝ仲ゝ歌ゝ名集て信
恨のうち信ゝ信ゝ信出りるゝ孫き遠今まゝ
乃ゝ出れゝ山ゝ付ゝ山ゝ信ゝ山ゝ信ゝひとするゝ
今ゝおゝ人ゝ名〳〵ゝ一ゝ人ゝ人ゝ菊ゝ山ゝ
ゝ人の百人の方ゝ人今一ゝと歌ゝて留指
○【注】只戻ゝ春ゝ春ゝ山ゝ指ゝ歌おゝ
　八

□ 某他ゝ孫ゝの子指ゝ夕ゝまゝれ　九

【注】あるゝ指ゝ系の人ゝ夕ゝちゝ遠ゝ信ゝ又ち又
指の指ゝ付ゝう某他ゝ孫ゝ歌ゝ孫ゝ夕ゝ年ゝれ
ゝ仁ゝ不忠他の弁天信ゝ山ゝ呑ゝ山ゝ

[illegible]の苦の様を笑ふ姿をおかしがるやうにも見あ
とゝて夜寒を付さうにも見あ

○ 寒くまたらう[illegible]葉をすき　水

[illegible]の白菖蒲は湾の様ふ[illegible]を働く体ふ[illegible]
[illegible]の職人を付さう[illegible]を[illegible]て姿合寸
[illegible]も[illegible]葉も菖蒲も[illegible]の云下の
やり白く寒い菖蒲の辺ふ[illegible]て[illegible]ふ
[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]
[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]
[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]
[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]

■ 月まだる唐瑞の髪の赤枯　兮

[illegible]の白[illegible]ニモスカセズ寒ふ[illegible]
白と[illegible]枯の老る枯を付さう月ふ[illegible]

[illegible]の髪の赤枯てトハ紙[illegible]て門ふ[illegible]体ふ枯と
他ふ[illegible]て菊唐[illegible]の様ふ[illegible]時ふ了髪の赤
枯ふ[illegible]寒の門[illegible]せを[illegible]て[illegible]
人ちや今ふ[illegible]も[illegible]
[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]
[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]
ちやと[illegible]ふ[illegible]　○[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]
[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]
[illegible]て巾を載く丈ふ似る髪ハ後白惑
赤枯ていくまふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]
[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]
く是[illegible]他[illegible]ふ[illegible]ハ白[illegible]
男女をおむとする[illegible]ひ[illegible]
■ 寒ヤぬ枯[illegible]を[illegible]　義
寒白[illegible]の老女の月まふて髪赤
枯ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]

うり哀やあ祖臨府をまつりハ美人玄祥陸佐
祖英孫山帝星祥陸の今ハ在て旧里よ
ゑ伝ゐきを刑氏の母ゆく歌きるやゆむ
と衣を織今ゑや来むと祖おて歌イ
赤枯る髪も未ゑ寸待佗る風佐之侯
ゑい織布搗衣て振の夫をまつあよ祖を意
ゑまあイ寝いゑをまつ祖あれい意やあ祖佐
うり 陪打祥士 鎮州臨済義玄禅師曹州
南華人也姓邢氏幼負出塵之志及
落髪進具慕禅宗初在黄檗希運師後
還鄉憲病徇趙人之請住子城南臨
濟禅苑矧 ○ 陪刻陸ゑまを慶尾の伝 陪刻陸 英
孫祥陸陶中ゑ陸あよ之をけ一伝 陪ハ 人
遠之英孫臨府の陸之伝灯録九ゑ参一
■ 秋桜乃売ゑ声きく移さい 水
◆ゐ白大悟の祥尼祖打ワ陸府の語言をまつ

体一人ち云ゑ之を付くり秋桜の売ゑ声きく移
さハソモサントハ陸府ハ先尼を呵ゆむと見求る
様ゑと入てとりおをそる祖もさゑ寺在上
を眼ゑ横十宮陸声関手一向して言乃三
十棒乃ゑ三十棒と横振搆て待をそる
ゑ〳〵ゑの祖ハ陸ゑれい家ゑて陸をちうり美
家ゑ陸府ゑ遠て高弟ゑやむと見ゑを移き
人を付ゑい移味宮りむを語間の陸府を
一振ゆうい通ゆる様関之 ○ 陸陸陸を付て見
むゑゑ人ゑ祥ゑゑい義の祥貴を様乃ぬ有之
■ 為祖実ちくゑ宮ゑあつちり 五
◆ゐ白秋桜の売ゑ声きく 初風の桜の声寄
体一関 ゑ人ち指脇ゑ指を付さう有の実伝ゑ
亭ゑあちゆ人ハ松ゑ志ゑ付ゑる桜の売の時ぐ
ちく横ゆく風の空白ゆ知ゑアレ空桜のゆく
ワイと目をとむゑまをりュ校ゑすゑる有実の

若と伝ふ三ヶ所のあちこちと云ふる歌を寄せ辞世
して人々拾ふ人宴よりの哀めの声きく意を
夢にあり千句ありても原とおもむ ○同本来世
一おのれ人に医師二百三云人世伝てもあやすき拾
さ付ける就の臨所よ逐さる所く

□ 枝より伏を開き山張より 義

○おのおのちり寄一箇にて高き高きを付て乗る
伝ふ人世伏の間を付より枝より伏を寄き
山張より人々の風系より上る歌人の枝伏
れ出ヶ寄て世人に墨掛て付寄詠する拾く
て寄りハさ付おてそこ寄り一公を移す射
の向より 法性 大々寄より ○注同天二百一云人拾
を云て寄り拾て石上を植寄り山門の系より拾ふ雪
水と云ハ枝伏と云

■ 一人い典侍の局う内伝う 玉

○おの枝より伏と寄き山張より集て山上寄人ル

伝ふ人世伏系山世の拾を付より一人いすけの局う
内伝うトハ 平家物語 ○建れ門院西面より西ひ
世年ち伏僧上人を訪て山ていおろさもあひ山
家光院の傍より尾張て寄すけの局伏伎の内伝と
伝ふ伏すけ伝ぬ人を文治二年の比月後白河
法皇院崩ましく院ふて他中より行の橋ち布て彼
の山ふを墨おふれ上山裏あれい方ア寄院花
あり寄て尾を見ふる安院いすきて傍の老尼あ
り寄と問ふる故お納云信西の娘伏伎の内伝と
ト伝ふやくみて山の上より墨保の尼二人乃を
アレハと伝あれい老尼侯を押て花崖村より
あふ女院ふて凡木より厳お伝ふる云用中
納云の娘すけの局とやもあす法れい法皇
に侯より凡をぬひアノ宴伝じおふる女院ら
又一人いすけの局らアノ歌おふるいるもすけの
内伝ふと云返て見ふて寄果ふる歌を歌ふ

おなじく〈女文は振向の事〉あられと歌の詠を主あ
むとて作らう仕る用意人いすけの局ト作
るべき所あれと文そい次の妻むらう〳〵ある所よ
スケノ局ヲスケ内ちにをもて作を付らう
○図天い女院今人いすけの局ら所院の内侍ら
と又上ゆふ拾ハ浙之拾ハ浙之拾ハ独推あ
拾ゆて歌の作を考ひ所院ら尾ゆ〳〵ら作よ
ある〳〵図二言葉の振を他ゆ〳〵ら拾ハ戸手ハ
の付ハ了ハ方るすんの局又あちゆの内侍ちやと
あ手の方姓のさて〳〵ある作ハモ人遠之

■ 三日の花鶯鶯尾ハ名軍 五

会ある人いすけの局ら又一人い伺の内侍ら尾ハ事
ある人を〳〵問ト又ら迎あ手の拾を付らう三日の
もあゆむ尾ハの名字ハ皇后の宮ゆ〳〵ら
侍源氏ゆ中客の鶯合あれいさゆ方もと
鶯の問ら名を出友女ら て聞むる拾〳〵おい

一人の局ゆを数ゆ事ゆ拾〳〵う ○図三日あ
ら寺三ケの時の人ハ図三ケト書ゆ尾ハむ
図廿五友数ゆ迎あて鶯合ある作ハ一拾〳〵
鶯合ゆあゆむ尾ハ名ハ〳〵ゆ一戸三ケのむハ三名
の作の名〳〵高松ゆ〳〵ら名を付合一猪ゆ人
ゆ作数ゆ拾ハ拾を拾〳〵

■ 高〳〵みいさゆむ歌の猪作州 兮

図おゆ三日の名字ハ字神使の名氏歌ト又迎
神いさあを付ゆう白髪いさゆ歌の〳〵ト州ハ
出拾ゆう歌後へ中ハ次浦院の海辺の山林中
ゆ白髪的神あり女院門ゆ独作州的神
あり上古二神中あり〳〵神字ゆて海藻
あれ作あを換寺作作州地を作ある不有ゆ白
髪の好むゆ〳〵を換ゆ時ハ字作ゆ風和作附
〳〵ゆ作を作て三月ゆて氏ゆの名美附乃
ゆ夜来ゆて猪を拾ゆ〳〵ゆを拾列を和ゆて〳〵ゆ州の

社より遥て又白髪の社おはす侍りと州の献おと
移まて美おを尽る時に如烈風作毛を失ひ
とゝ伝ふるさるを是移お換宮もふ社と年今の
お日は十式殆れり　○因本白髪ト張ル
陸奥丙社〈玄〉の黄を尋る作て白髪の義も
黄紙すとふんは戸名の嶮合する時分ふ玉
の稲居も芳を白髪の老も冨身自由る水安
〈出〉〈出〉は〈ん〉を高めを絞て注をむとする我侍の
云興〈〈式を初れを〉後表殆く後程を〉
九者い序俗名は比〉表殆を初程力を後表
出名後程又殆を舉る天法申れも後〉表〉
むい表字きあを表の自拙を位七陳梅
を変まあるへきるを

杖をひくるをろを十歩

因一おい左尺を僅するもろ由やはをを表れ

ゆ〉〉ふんもて水の光を除りり出り
包ゝて月を高寸表れる　仕玉
陸奥僅十歩の方も表〉〉〉て月出
るゝゝゝ〉ふ知を表れる孔お稲表の世い
は孔かの玉〉と歌表の〉〉り　○再板ふクレ
を表れを指遠るを川沿て陸奥アクレと〉
〉り表い追かを表り

□　水ふゝゆくゝ孔の稲表　京五
▲布の色ゝて月を孔高寸宮を保ゝ〉一面を
アを宮更物の勢を付〉り水ふゝゆくゝ孔の稲表
ハ水の上とふ面の孔を表ぢく拙を稲表り
除て知を変る天お表を稲表り　○因天地時の
水月稲表と冨碑面〉水の俗ゝを水の稲
表と俗〉り陸奥時の面孔れ孔の水孔上
を月新の〉ふ付きを稲表を付〉り僅一
出の中も生死あり況やを歩の方を陸を

[illegible]

□ 柴乃木の葉を初物人社矢に有て　此水
[illegible]おの白水なる川を水相にして稲まのとく房
しく縮ゆく侍ると云[illegible]貢人の用を付ようとの
[illegible]を初物人の矢に有てハ物人のお連来る
拾[illegible]笠や矢局を志ざす隠すゝ名歌に姿
をえらぬ想物の常あれとも家ゝ初物乃
妻よりもてる才三の位を[illegible]○陸奥おの云事
を故りてゝ此物人ふゝ[illegible]稲まに思ふ
附録快多一ハ物人ハ位ハ[illegible]

■ 北部門を押明乃妻　箭
[illegible]おの白矢字服まあ師ゝて初物を夜き博
門を出る士ト又左[illegible]貢侍を付ようゝ小の門ゝを押
明のミ多キ去ト八文時ゝ乃を[illegible]ゝ小の山敬く

武京規式の初物ゝ押明ト[illegible]きをのト作
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ

門を出入するを門は入むとてイとる仕はとてう今出
門に山福一寺白川辺の出口あれい左ひら
多く通れり扇に俗はジヨリン出り
行を扇のとく身形て貧形を作り口を洗ひ
茅紙のとく柄を付う ○注釈大内の雅び
うとうむさきを分うれ内門あれ赤い須れ
む貞掃除に蕪おく貞つ出門に朝半
門よりて女御孫に入内の時あるに時は実
ぬ門に入まう卑物通入寺武家物も
出寺る茶菓あるもあきいるあきぬ人
あれいとてかまくも出られう所所
■ 茶筅問出をなむ茶への筅 正平
▲おのるるる人侯の風まるるるさる仕上天貧
情の用を付う茶の問出をむ茶方のた人
ハ人の舎摩は筅(ナカ)に浸さむと搖は出るる
を貞辺るる人接はおに汚されてる献ち遠て

子金を共ちく惜るさえて作もをりさい茶人
のんりと呼接 ○注釈掃除はきれんはの茶
人を付う草筅のもとすきもかくる降は
降ていと惜む仕に牧收已因茶人は筅に
英とる人名の茶の対に八百法く
□ ちうたげはおもむ娘やしづきて 五
▲おの茶宮ちう筅に宮を延るを惜て茶の
うち搖まむ問とえ出貞法人を付う二八
みも中は一宮を浸る屋高と名茶版の投
まと(三)カヒ(四)ウタ(五)ある(六)娘人侍さるを時(七)きき
宮えて文はかつきて(八)むわう又(九)みも面
のたんわ(十)をえてりに暖あれいとしつもむ
(十一)を味のとあるを娘の法(十二)ある拾ぐ人ちう
たげハラウタクラウタとと活く状(十三)云は下ト
作る問俗のカハユデのんかづくハカニコミ
ツキシタカフし ○注釈お法は男七侍茶の娘

を牽人の誘て指葉より出て仲たちて行に労す
る文かつくい墨とする文に因たちて行に苦
さうしかつくい作付に国労乳良極蔦文
庭文育之全仲たちて行ト情ていよ寸

■ 灯篭二ツよ情たちて

おなたちてけよおもむ吾娘侍ておこフ
仲ト人左術ゆき意を付うう灯乃二ツよ情
けるトハ図二人の男お毎よ通て徐木乃
めく妹ら彩よ灯ちを以五よ労寸情を
尽て和ようを仲乃よ侍えむとも宮ちきさ
る上代の意の指たり 図義此句を歳て仲
の葉より作と向ふ社宮お伽迄よの画よ
り見ゆ〜とそうすをよ妹妹の幽昊灯ちを
指葉ている姿より大和お指一人の娘よ黄百
男葱乎男の通て仲ゆを合て作むたり
○注釈おなを指を灯ちの画よ准てみそう男〈猶一

改て男も灯ちを指て情けるお指に接葉
■ 三角萩のすそよ力を撰まず 義
おなを妹ら義よ彩を灯ちを以ちを撰て義れ
一二人ら情義の志ちと情る仲ト原体よ人ら情
の記れた行ちう 高萩のすそよ力を撰れす
トハ其義よ萩女命むゆを向ちを人て
ア人女命むの一ゆを風よ年よ萩萩のいで子
ひをやさんさもでとすをひて〜んをを古
寿お指ゆをよ合義の陰世を記する指く △
家よ枕左の義を付ゆいるても麻とおむ
義の灯ちハ徐木二ゆト作ても対れハ向〜されい
徐ちる其灯ちを家よて体よ人るゆ宮法く
依句紛の法を流む先氏灯ちト萩ト等寸時ん
二句のちを恋柳 力義ト力姿彩も情比ト力撰
と合寸ゆら其二人の〜ト「人ち人の情ト明よちち
ちくコレ姿先情後仲く ○図情比とよを

為萩とあるよりさらに何とも弱きおもかれとあ
の強くて萩のさかれぬや萩の弱くて為を
さかさぬや後拾遺秋風ふきしとすきふ
中古もむ我度おくはあれぬもしのんは隔
分意に打ちの時吉ふ為と萩との風情頭子
の姿も浴衣の撰抜も又西は陸奥打ちの二つと
ふよ為と萩とみしふる哀角力は因幡衣も
みても果もし思まり思ふこの山の裁とも
ふ奇ふ為を大和お浦の伏ふ宮ふにも
陸奥絵ふ吉ふる打ちの見ふてきや

■ 若菜ふ人 青ーきちきの情　水

為萩の力と余の若力とを手もむとふ人
ふ丈力撰に云蓋と吉ふ詞とふ吉丈次の
武河を行ふりそだ吉ふ青ー伝乗の情とハ
直立ふるそだでふ人ふ吉ふくてふ萩や落ふる力
年業めを撰ふる萩で何とてお合の情

有ふ為ふうそと伝乗情の迎花ふを入て詞
戦する撰人ふ吉ふハ俗浴の者方為を次ふ
てふ雅云のふ人ふとふてふり 宇 ダニそ俗のサへのん
又桃形梅ふの時ふすりたのん又デモのんふも
用ふり用へ俗のマデのん万ふふ鄙とかく
ふ丈主ふるおおてふふ為ふるおとふんふて
丈主ふるおのふの乃きふるむも乃ふるとふ詞
しえふり乃ふおふくはサへとふ伝ふり ○陸奥
萩の角力とふふ次乱ふる撰秋風烈ーき青
そだ時を行ふり比ハ一段人

■ 名月秋刃云打の撰集ーて　西
為ふそれふデふちー与秋そふも為ふ時と為ふ詞ト
又ふ伝情ー雅人を行ふり名月秋刃云打の
撰集ーてふ為角又ふ稀人ふ何弛ふも為ふ
と為ふきふき分他ふーふも殊為ふる撰人
■ ふもー貴ふふ乃ふ時ふきふく　今

◆おるの字刃之れのやうに余激て去ぬ
れば其セ一に向ト云ふ丈人の仆業を付さうとも
ふ乃る時やきくハ小岡りの和ひ笑ふ人べの拾
ふ乃を立おれて乃連もるき山砂よをう時や
のおさひき声をきくア、刃立れてるるき去ら
ばるさ拾よ眠き目ハーとおぬつ人和乃たとる
拾ふ玉ふ立育に時や啓ふるふ系ア一 ○注釈
れ月ふ去ふる乃くるれ拾の人さつ人る拾て月と
るこの照ふに一刻ふ刃立れ拾何と世れし
□ 思ふ(九)るの業とて雑を造ふる 水
◆おるの保猶セムトるひ笑ふ世くて乃て時や
きく左住ノ人と云ふ丈用を付さう思ふるるの
業とて雑を造ふるト、万ふよ新ふふる
女の住然ふ保よやあてい多次の仮ふもとて
雑作ふるふ〻新(オトキス)ふの声少て来ふやる拾
の逆付ふ(元)とてい住テのんり ○武思い世よ

国思ふるヨ立(六)岐中一度の続作云ふれいる文字
ふくてハるに仆ふく続寸注釈怪き拾よ
信人住て藏ふ油乃ふき拾に一刻ふ時や
何と世れし

□ 命婦乃思ふう采ふ人ふ寸 五
◆おるの思ふる社厨ひさふ雑作て雑拾する
刃母ト云ふ寸ふひ拾を付さう氣物の思ふ
り采ふ人ふ寸ハ故ふて宮中ふ書ふき
姫ふト住の局ふの病ふ新ふ命物ふう
采衣彼令ふふも家ふ殆る拾ふ命物い
女友の五位已上をふて ○注釈雑作る藏
を武信人ふて西縁の命物ふう助力の付に
ハ位ふ采ふ人ふ寸ふ何ふ思ふて藏せし
や又雑藏武信人ふも平ふふ付寸(元)武二句
やふふき人の武ふも持ふ家ふ
□ 去ハ位ふ住岐のふふ最中き 今

金おの白米ノ二斗ヲ文金ト物の思ひとりモ米度豆ヲ入ときに
寸作ト又ヒ又ヒ又るよ詰め難文を付さり去恨と
法師の水よ罵りト八演ふの家こいつも文よ
そこのうるまあるに社のまに恨とも法師よ罵
て目も弟れぬ変あれ関白太信家のに敢い
ヤよ及寸金物の思ひとも物雑きに物ヒヤ
ブむ指ノ〈思ひ字ヒうむ指よ記信ヤ逆付乃
□詰ノ　○玄米の清おとは法師後の又ヒおと
注釈林ふ祖ようのに敢ヒてあめ〈天慶清流大使の
皇子雑法ヒて言ふよあひの法ヒ接ふ

■　佛喰ふる奥をどきれり　義

金おの白米ヒ金白米ヒ於て使伴ヒ作
ト又ヒ又ヒ又ヒおを付さり仏喰ふる奥紀れり
ト又注釈渋谷志及浦の長田作平と云恵空
上人のあれよりて一人金佛の物共をあるある
時志どの浦法師ヒそ打ふる鞭を紀て恵

仏信都作の法陀の像をに乃〜加ふ乃〜尾
私の中よ信の法敬ふ乃ふ〜恵安ヨ雑文を
以ふ〜廉とみし

□　猫ふる花又二斗帝と仰られて　五

金おの仏喰ふる奥かふいいおの喰太男ト又
ヒ又人ヒ付ふり猫ふるむ又二ヒと仰られてハ
およ金ふる中老ふ老ふ〜時い毒蛇で
も喰ふるとも　　毒蛇や仏喰ヒ祖の
大奥ヒ彩　　猫むヒ又ヒ〜ヒい忘も及
ぬ男ヒやい　　ふるも思ヒと浮ふる恵
四日向ヒ　　ふ〜ヒふ〜ヒ志家家ふり或
時ヒ国　　祖ヒむヒ又ヒ僅ふる法
ヒ人ヒ　　ふ〜ヒふ〜ヒ猫ふるヒ又猫
ふ〜ヒ　　ふ〜ヒ

■　九　童乃ヒふ〜ヒけ六及　玉

金おの仏喰ふる伴ト又ヒ門外

のけ〜きこたなうけんの畦の畑ハ五反ハ手ろの
間ハ五形位ゝるこ〜ろ〜ゝ〜ゝ〜ゝ

子宿の路に立る松の白うとをり〜 注記

図矢刺の村出の庄より大松迄廿丁あり

行人疲て脚力を享保の比機巧〜

■ 捨しまい成るたけは伸つむ　水

雲の白打束ねき松を松ま淮て泳ぎ〜仲ア金

其ひと迷さう物ぬ内正宿を拾て松淮

る光教い新庄の背氏村う出ア之合て

二子塚庄ア之松きさる育名て成出の度い

僕細もやうと松を所て村神の門は拾て拾

やうと殺ま十とそうも成めれい今紫る出

も伸ア〜ひ松力まの子松ア〜ア〜ア〜

松子の公家も立ア時あれい其宿の松は淮て

二ア〜ア〜ア〜いやうまとまるきま性ア〜ア

公ア淮付ア依ア〜むて捨子ア〜ア其子を番ま

入時き沢の松或い性ア之を記〜南氏或い子ア

きあと松ま抑記〜其内を松て拾る又拾

ア〜ア〜も其人の内を又屋て右ア〜ア〜ア或い度ま

い出入ア〜ア〜ア〜

玉の法狂人者の長と為て法束するを以て
い以さ一名い風人の業あれいと刀を用まう
て食事寺い信夫交今ちよ英金不多交
不保り ▲コハ不用の汲をう仲さて五ま乱
とさけるる時五ちく有明自遠方来不亦
説乎ノ人あり ○国々新をもれ刀を夫て
世を風流の狂人と為てんう古法あと以
寄むむ笠重呂天雪香狂楚地花のんは八
狂者と夫人あ人刃
みてい少手因刀夫て手用ちする而く友
東の紙の向付くさてく年字字ノ寺は誣云
く若ちい者を居呂まを向合て付る法
い極てあ一寸法を向付はさるあます

■ 樓ようる旅ら行袖をとく 羅

▲あ句者の一屋ら以外唐人呂を海をくて
哉東る歌句を孤ヒは忘と法指の酒屋

を付ようり衿を言旅ら行袖をとくよ又お方
も公補る言法れ乱ノ東る屋を夫寺自行袖
をとく仲ノ窓袖を即て衿を寺ちう仲を屋
ある大を金生屋の化装ヒり ○陸翁呂の写屋
て出一狂人を号ノ者曲表れて言旅ら衿を附て
仲ノ言ちを寺る仲は狂者は狂者ちをうんあ一化言
を陸れ一数旅客の酒屋

□ 化人と指ノ横を脇ようさも 五

参句者ら衿をて孔を脇ようさも
ろ呂又客の法を付ら化人を指を横を脇ようさ
ノ法は化人を化ある法あ一我亦云下を
夫へきやもいろを法脇ようて二人入て死
すやと袖をく言旅ら人呂の屋を交て哉を
人中を乱て乗む指ノ陸翁劉伯倫性者酒
嘗携ノ一壺酒使人荷鋤唱曰死便埋
我は旅を合ようは

■ けーの一字を名とせんを祈　玉

[illegible]化人等化する浮世の限友達を招て入滅の日より[illegible]する体に[illegible]物の招をなくう けーの字を名とせんを祈よ死を[illegible]ふ 滅をとるとて仏花を活て大なる宴[illegible]けし のちをとく除く成仏もしと杯盤を注を あめくるい生死自在の大居士[illegible]雲 鈴行脚把姑二百二る滅をとるとて他友を招 き洋友て大なる宴[illegible]きを[illegible]ると招まへ を人に行る日宴の数尚とおもへつるを 新もちされに除と[illegible]ると[illegible]ると[illegible]入滅 [illegible]れい各[illegible]き彼[illegible]の法[illegible]の中を [illegible]せ[illegible]を嗜教[illegible]ケ[illegible]り文[illegible]を[illegible] [illegible]ると[illegible]し ○[illegible]意を和と分て一変[illegible] 一休の伝に[illegible]一休未成乃の時[illegible]注け 一枕を除て年来の面目[illegible]を[illegible]一月[illegible]

意を成り」と[illegible]伝[illegible]百[illegible]

■ 三日月の朱いくく陸の声　義

[illegible]けーの[illegible]て[illegible]今大悟する体に[illegible] 文情の招をなくう三て月の朱いくく陸乃 声に寂滅の朱と接拶陸と[illegible]ふ とちるもの[illegible]の[illegible]を[illegible]て迷の者[illegible] くくくくくと者る陸[illegible]を[illegible]乃 体に[illegible]を[illegible]を[illegible]乃 体に[illegible]結付[illegible] ○[illegible]二[illegible]のけーを祈の 字[illegible]を[illegible]て月を陸の字を[illegible] 注[illegible]けーを入れと分て[illegible]り[illegible]乃の人の伸[illegible] 出[illegible]おけーのちを[illegible]大悟の[illegible]陸 の[illegible]を祈[illegible]固を[illegible]体[illegible]迷[illegible]

■ 秋湖出て琴[illegible]ます　去　水

大[illegible]月と陸と西すて朱[illegible]きい三井ちと 乃を[illegible]上の朱を透乃る指を分て秋湖迎

こと琴の事なり上人湖上の舟より同じ曲を弾
琴を弾じて空しかるべき白居易琴今在
南方禪在西方の歌あり ○翁西山より
入おもむき湖上の月舟を惜て琴ひく体
に方角も自他も遠く隔て園一塊無言にして
彷彿たる琴を聞こゆるに湖上の月推量に届くまし
推量に届くまし湖上の月推量に届くまし

□ みるるをも許してたぜを放れる　玉

大意 西方の琴を聞く琴の哀さを感じ侍ると
ころの月用を外にうつるをも許してたぜを放れ
るとは殺生禁を破むとする人の湖上の曲を感
入て月奥を乗り移る風俗通琴を為言
禁也雅之為言正也言君子守正以
自禁也夫以正雅之声動感正実故
善心勝邪悪禁り〇琴説傳琴もひろ
ゑ弾じ奏もの琴を移守琴の音の拍人に新

月拍の拍巳之ちうて伽の変ありや

○ 声よき会佛義を陳る　兮

新白楽天く琴を弾ずれば会仏を聞く拍る体上人
を義性の尾の金仏守て対揚る拍を付さ
り〇家よ殊揚体伽も拍巳ある事始より知
う家に只人きくの此られて拍ぬく拍ト
月を二云沢さやぬ袖補の陳上ヒ入陳と
阿弥を釈の月て名し拍よりて〇天琴
を整く会佛に至く冬日三尼の要不ヒ伽の
与奪の或と

■ 新陳きり打れ上る記伝て　水

新白楽天く風和陳き三昧物の会仏を原
釈さきく体上人を拍陳去を付う新月
きり打りよ記伝てよ時明する灯のまく
あり去くみるる夫屋の会仏を陳く空泳
月の年を伝て伽ての月ひと月くとも支を拍く

てはあぬ指のきりくちくびハウラブりの約
人の陸よおろす指之○産約田孔佗任の文て
人和き仲に佗の一人扮く　五
（タヘカラフ）
二　ひらきハ　もあ扶節ひく
▲約白打を用よ記佗ひさこれの表ア人左
文用と分さり指面ひくも扶の節ひく
よ面て弥されい妹い祖手く砂られとも彼
方よ扶明みて人目所れい情よりむと
ろこと人の弱むるを知れ指ひとすれと
んやるセみれいまりあつて妹ち和節ひて
爰弱ち指くテ人ハかくやむと込こと
れぬ詞そり未を面て今あ〜版ん情もハ
つよ様もを陸て文る子の正面あ〜れをふ
す詞ひ白い古云のつもをつハモと白ろ
て用ろりろ只指ろ指くもよ改て弱度
ち〜○産約人名すこ初〜表おて今月

無ものやむと白ろふ人を立り打情よ記
佗て節ひく白ろ人つる指に辞遠あれ
と先人作あれい中ゑむりあす
▲　表れ花槐ろ花孔張よ入　今
▲約白指ろ人つも人目情す節ひく体ト
及ち花ろ人の無されを対ろ表れ孔版
花の張よ入に手和に紙屋の板橋よ約
の只眉よおれる髪男の会体ひろを
名ろりてそこちむとすると節捕られ引
放て花の張よ指ろ指ろを所ハちこ度
追ちくを他ろ浮しちる間く　産約節ひ
くをよ白ろつる表の知みるよ祝も情て
むと無像る指に情多く表陸よ志要
化あきろを楽する法いあ〜
▲　北ろ陸の日を我も間く　約
産約約白西行保のむを立て白表ろ体ト及古

炭素を述べり炭素の日を我も問へく六月
ちくいちのかそれ去年九月の中月の
比と為すこと為て炭日を成仏せ一西行のと
く我もむ聖を成仏せやと門風弟人の
ごと述る拾ち▲梅花の陽を入る人を西行の
んをを考へ人をへる所を炭素と　傳
作でい学を炭素と作て去きとせ一不治
し　○炭素の全体はくくしんさるもやま
さて数色は作や多を陽をきに西行の寄の
拾ある所を又炭月の寄を作て分りに証
ちくしをを云て炭素に問へる所あり

辰年は若大たく寒さ付られと
注釈万葉集を大たく寒すられと已る
ことを作きは寄をもて炭素を対すり
炭素の已る寄を思へる　寄五

問ひてそハコレフレを称問へコレに強て引分る
問ひしい所はるんそれおるる問を一つを七
一辞へは問へ炭を対して己る寄を思へ
ちめをあをを思きに伝るをやと思へん
と思をするを寄を寄をと考へり出り大炭
炭素の出方の所を来るを万を云を一白に
一○注釈寄をすけも七でを作とる
をく伊勢をを物き炭素あれ寄をいて
思へめやを炭一を反語成人の和を思へ
ちを白くを和と考へる白を炭を白の
論を一に俱を考へ白を中へを反語を和
■人孔雀を後と　初　為与
▲赤白炭素の白寄の外を対する人ある作
と人を炭人を付へ人の孔雀を後とく考へハ
は炭素後麿の問一朴炭拾を沒を己へ
寄の後麿孔を拾むを人を成人の寄分

ちい宮て焉うむを麼ちて淺あいとを匿
うむ又丈淺を麼て人ゝ稍を作ゝしる
麼所も多い炭形砥形ま塗れて自の所
を淺所を炭麼丈物の焉きも淺麼の所方
も門ゝ世所る形拾うと一面の淺ま三人の所を物
ぐゝる形ゝ　○[和]あま淺を白セ麼を舎釈ゝ
炭麼の垢ま淺麼の法きを附ゝうゝ[註]炭
麼も丈業い鮮ゝ気と麼いいて焉うめ淺麼
も他の形ま方きき業い和セと書い嘗ま書ま
む[註]拾ゝ[註]茨うゝさる次めき宣淺い作ゝす
稍ま此二白を麼ゝ　玄巳物ゝ[小本]淺麼ゝ[註]と仮
久ゝ付ゝうも狀ゝ

■　花蘇て書の書ま咲後り　杜ま
書白人の稍ま淺麼ま白ゝ形ゝ白ゝ所ま方
丈情の設形を付ゝうゝハト淺麼和と白ゝ世
中ま白ゝ世い宣ゝ天の芋拾の中ま花茨の後咲

ゝる形ゝとイ人る丈四ま辺ま書晒の[註]書あ
り依ゝ世書ゝ西咲後ゝうゝと人ゝる能て白ゝ
く我書ま雷麼ゝ花茨を稍ま志むも宣ま
の鳳を所ゝる能す宛[註]蛾[註]眉ゝ和死て
かゝ世晒の白書と書ゝうと物麼の世を欲す
拾ゝ人の稍ト晒書ゝ白ゝ白ゝ明宣の笛の法
書ま保ま季ゝ　○[註]文[和]て枯の芋木皆あゝ
ゝる書を形ゝうゝ拾ゝる書の書と作ゝ法
きゝ付ゝい淺麼の仕束の情て稍ま世と
白セ宣ゝま和ゝ白ゝ書セ淺ゝ女の説ゝれゝ茨
ゝ内ゝ如夜丈のゝを白めゝうゝ白ゝ接ゝ多ゝ
□　郭人ゝる宣ゝの月出ゝ　池水
[註]ゝる生[註]ゝ花茨ゝ書の書[註]書ゝ淺ゝうゝ白
と人ゝ白ゝ世ゝ情を付ゝうゝ書ゝ淺ゝ人ゝる宣ゝの月出ゝ
りゝ郭ゝの麼穂拾ゝ田面の形ゝを宣ゝう脇
ゝる郭説のお作ゝ淺物ゝ稍本の書ま牛

ちの畑を白枝うてせこう家をもてこの畑を
花枝の吾ちうる田をと子せこうへくう　○
注釈　この畑の汚き仕を伝授とかもも林和靖の
仕を今はうと注釈　古人の仕に大　野好者故
人事をとりて林に掃象と伝人古人の所を好
むおのす

□　風ふきぬ秋の日親は冷き日　義
◆おの月出ちの野原の中ぬるあしとす
るあ家の仕ト人ち　頁見の歌を付さう風ふきぬ
秋の日親は冷き日ハ秋風千高の限を吾て
お休き日は冷ト人も多く新冷もて今
親の夕暮を行作り宮殿の拾く　注釈　都戸と
いとう俗家の家を付さう秋のいと哀なる
冷さ多くて忙殺る仕百事の親の暮あり
う　○　注釈　古酒いとうくれの拾ニ吉秋乃
沸きま風も次す親ふさ冷き家を仕ハ

浪く古酒の中の拾のと何社迷て

□　萩おる宮を市ふ千　羽宮
◆おの冷き日ふ家せる寺仕ト人ち　頁代
を付さう萩おる宮を市ふ千ト萩の家
親晒ふとて孫宮を振美さもて冷代
とむとて風次ふ家を振ふく拾
者重好冷信社ふ仕る時苑織て級や仕ま
ふ風雅人の門織を付さう但ハ萩秋きふい
拾　○　注釈　萩ト浅ふう

□　加茂川や胡広千代松や近ふ　ミン
◆おの萩おる宮を市ふ店ふま振する仕ト人ち　おを
付さうかもかや胡広千代松やく近ト人ち　おの
萩をきの親ふ冷の市店の拾く松ふ拾き宮を
きふ古代の拾く　注釈　上かものの川上ふ稲荷の祠あり
氏神好ちあふとて丈辺胡広を拾ふ社業ふ家
氏家を胡広千代ふ子もの社ふもそう帰か

ものの来社して九月上午五日より▲上ものもの方を一反渡ハ此れとも村氏ある人きあるる社
あるよ見れとも去ること今丈記行ハ○
[朱]辺レ上洛こう[紅]おの思をあの伊ゆとんこうを
八反[注紅]市ょ来あるく[朱]ハ注記こ

□ 宗入会の聟ありーき比 五

[紅]おるおふをこ[朱]文字入伊ょ丈を行こう
宗会の聟ありーき比ハ来こう必来むと男
の行ある歩ハ京毎ょ ○[注紅]丈五知ハ京毎ょ
嫁聟の来るよ我家の聟ハ伊加来すとあた
うかる伊ハ嫁ゆこ辺ニハ伊とやれむるみさ
へ南き秋中ょおうう客ょあくるはやや

□ ちふる布ちく寄ょ実れて 水

[紅]おるひ字ハ云号の聟ありるきひの寝こ
[注紅]ちふるく拾を分こうちふる布ちく寄ょ
実れてトハ丈来あるうの晒なきこする女あ

らむ打返す杵身の衰あるハ我分の上
や陸つくむと友ともちのあ実るれ拾 ○[注紅]
ひ字ょ服屋す

■ うきられてくちと就る三年 五

[紅]おるひ伊ちふる布つく人くり寄ょ実れ言
ハフカラムハ白とう金[朱]斤ハ言ハ伊ある拾を付
こううきられを就る月自ハ三年二間のお
福ょて世ハ十八の嫁時ょて分の人中ょ実
れあくく独思る風情さんある人の哀と思
や拾く ○[注紅]孤まくょ袖ひく人もあくて
後歌をお使ハ拾ハ自他遠く

■ 捨られてくれるきーの涯ち 笠

[紅]おる伊程ょ歩イくと水浅て我白孤きょ
の社を思や伊ハ丈[朱]文坊の歌おさ付こう拾
られてくれるちょきーの離ちハ丈川ょ一
捨きーの浮るきを入て伊も実ちと拾く

きーうと孫拙き男の祖父はるい遥去よ
逢妹ゐしといと哀く団扇ぱ其のん
ぱり ○注釈 悪女の化さよ他辺を道あてて
をつのむつすきを吳ぬる事よ雅名のある
をうて忘れる拙に並ねる

□ 大おりめ大焼あき人をうんむ 義

まゐ拙られて半死ゐのをつをうて云事を訳す
仲トうた立丈情の孤さ付さう大並ぬ巨焼ゐ
き人をうんむトハ亡人の辺昂て大入ぬ大焼乃
汚きさ宮ゐのをつをうを合て更伏を訳す。
拙ゑ ○注釈 他辺の伏及ゑすむ美色の老人
大ゐき巨焼ゐを拙を探らきうくと吉人
を二尋ゐる拙に拙ゑ ゑ並ぬトえう大
入ぬ不用の大焼うて大内ーゑんゐ

■ 門ち孔雀ゑ紙衣偽て病る 五

まゐ大ゐき水巨焼歌てア刃ぐずんと

ゑ死人ゑ入てにゐぬらゑ食むゑ河とうち貝人
丈情の拙を付さう大ゐき天食ゐ拙に大麦
ゑとうゑ並て拙を明す町の門麦木及
ゑ炭ゑ内ゑ拙ま社宮ゑ入て化ロうゑ内きん
むのおゑ男ゑ拙ちて内内ゆれ門麦の
祖父拙て一拙を明すゑ拙ゑ拙ゑ門麦書
小孔ゑ孔雀の主ゑゑゑ拙ゑ孔ゑ拙ゑ拙の
紙衣偽て水拙の風を清く拙ゑ ○注釈 亡人
を入むとゑ拙を失て今ゑ刃の並ゐく孤
巨孫の門ちゑ男ゑれゐる拙に主拙ゑ

□ 四刀原寸月のくゑきよ 兮

まゐ門ちゑ病ゑ尼者を着束ゑ人ゑ今貝
拙を付さう四刀原寸月のくゑきよトハ曲者ゑ
出合拔合孫ゑ仕留て束孫ゑを原さ
むと箱炊て病をうゑ紙衣被て刃ゐゑ
孫ゑ納ー四刀を侵ゑそゑと押やりてさゑぬ体

よりて寄指し間の中の美老口注のお人
をおて注ぬる作ハ
● 雪ふりて本尺の陸七つきく　氷
◆雪の月くきを雪ま結ぬて気新切し　血刀を
後ハ陸ハ云る作ハ全其所の指と分くう
雪降て本尺の陸七つきくハ武家及者
多きに尺の本尺に雪ふり月くきまイ
て右の手の刀を後ハ陸ハたのまま陸をうそ
へ取ぬ未一時ハとく独云する指と合記云
の姿を陸する指葉の流ま〔産科〕れよ
○〔再板〕上方ハ雪下りハ本出ぬ下り欠て下を
く成一を入ことむ
□ 雪まつ納豆たくみるへ　水
◆雪の雪ふ付きれまと七つ雪イハ陸陸引て尼
つれ未ま寄ハ間と合ま七内聊る指を分くう
雪まつ納豆たくみるへハかくと産祝の

雪ハ大方取食の納豆ふむ其ふ合ふく方
丈く押ふくうイヤ〜妨陸ふくうと門ふおよて尼
葉する地の乃ちる地の指方ま
取ふて時方の作ハ一夜ふ
□ 花のあと梅の徽を捨まる　菊
◆雪の雪ふ付きれハ雪まつ納豆たくみるへ〜ハ陸
の雪ハて時尼の指を取する作ハ丈ま指て
北用を分くう花のあと梅のかびを捨まるハふ
仕度ふむと去の取指拾ふ取て陸入ひと菊
ふ〜被ま残る梅ふの乾ひしるを入ひ指て
花ふ入るハ入ると尼ハ今ふ入ふ雪ハ秋雪
て納豆の雪ふ入と尼ハる指ふ　○〔再板〕すれ
陸梅の徽とハルハ本ふのハの上矢をおと尼ハ
陸ハ又ふ陸ふ陸ハ又ふハとハ雪ふとと陸りし
全作ふ陸ハ陸ハ本ふも雪ふ後も雪ふさるを〔産科〕
再板の陸ふ雪ふで大ま苦ふ〜ふ

□ 倍おいて手数（ドウ）を孔む　空

[illegible]

[illegible]

[illegible]

八十とせを三つ人る事毋拓てゝ八十伝く歳人れ拓で
も日本に廣れおろ子孫多する時に加る事の
人も出る様に上孫の代徳いき伝れ和と唱
する拓く代る二百余る成る事と伝るも同
しるなれども八十とせを三つと伝る八十八を
一生の本樫とする故に八十を三つ人る人ぢやれ
おイヤ巳ら宇くに八十を三つぢやらふと伝山
性の方遠を守せむれる如く伝くう圖法然上
人の雅宝は大和竹林ちの出家上て神武者
の玉汉をいる法宝は和して百家已上の男の
釈ある去を百集て是は後せむ是玉冠を後
る伝く代り〇遠八十事去の張十を三つ人る
世男遠八十を三つ人るとに七十三て七十三は成
れ八十の内を三つ人るとしるの宝誣伝く
□ 媒そもる梶樫乃書 玉
ある二百四千の子宮去寿する上代の伝

乃遠男人をめつる用を分ろう媒初る梶樫の
書に男人の書をおやうて妹の媒形れ
我の媒する初れと伝ふ但むと法て媒
仕る拓く梶樫書に上古樫おる女の通祢
く文を用の故るの女男の人とセ〜に後の
るく伝宝は吉の女の子を梶すの書ト
求て伝くる次に男の子みらくむれく ○陸翁
天人は七夕の書を媒する拓遠男書ち七夕
比書を迎てう宮老葉子の孝と織女の
不孝の遠分に男山七夕の荒篠を新して
事は一夜のあるセ伝きてとしく中備初るの
男宮に也る拓書く

■ 西南は桂乃むの蒼む時 玉

ある伝比二里の媒初る比初むに月と人に七
月ニて三の拓を分ろう西南は桂のむ乃蒼む
時に男書も未む媒の蒼初むと糸拓の

てき西南の月をアて口号てる文人の酒屋
と ○注釈 七月に悲しき中宮よりとうさもいそ
めと文うそへ様初るに詞へ分守
□ 蘭の油は去め木うん考 菊
まの白夕方西南まる三月さをてお祝す。
体とアたに文お病を分さり蘭の油ノ木う
つるとハ市中の人くハ夕方とも家業出
さと傷ア人ものの只や拾うて桂むは蘭を洗
うる作ふこ但李秘 園庭春花白蘭
草生澤畔婦人和油澤頭に ○注釈 ま
白あめきされ葉油と分さり点記録の
屋ろく菜油に仮点の香に点もあり
□ 物の家は奥ある女アて洞る 五
まる蘭苦しき病うて油ノ木の考きく体と
アたに物の趣を分さり物の家は奥ある女アて
ゆるとハ蘭床 さうる考の人の油店は点

おろ〳〵文病の書の振仮をアて物色も奥女
あ体や侯武秋風辞も蘭有秀兮菊
有芳懐佳人兮不能忘とつるとーと思
やる様ノ油色の書を物とあるとあ人ふを宮
ろおれと又次く文物を与さう ○国 口君に
注釈 油絞る家の宮考をアて文辺の物色と
ふ矢宮の対色接象く
□ 約縄は栗を洗て日乃考 兮
まの白物はまを矢家とアたに文女のワさを分さう
約縄は栗を洗て日の考とハ色偶ゆ引込
うる芋色の門の井尚の辺ある家は植居
て振約縄のわを垂ようーと込て栗をく
感るく偶る役人のアて通る振の迷分く ○注釈
掃さくあく約縄て栗洗て家に宮沟へ
むきの入るおあ寸コハ恵移を用ぬるそ
□ 家乃来て接は師る正月は 玉

[illegible]日[illegible]より栗陸[illegible]より[illegible]より[illegible]より

まゐりとく起てはやく京にまゐらんとおもふ所町より立て夫
情の動りきを分るりやはやく南京の土地
より知るべくの路元をまゐ一時の旅く【図】宇佐一
い皇都の祥り ○【裏】なほ旅一旅と仮名遣
うり【庭】南京と誤るり

□ 秋旅にて彼をもとめぬ人の像 兮

まゐ白雲芳一と旧都の芳を思ひ出て古
記は此の旅を分るり 秋旅にて彼をもとめぬ
人の像より佐く旧都のあるかるるもとめぬ古
記の歌もあるらと云代を思やる旅く【図】あ一の
町跡は秀吉公の才大和大納言殿の像あり
今も主人も何人の像をもとめぬ哀多一 宗

□ 泥まんの清き芹乃根 五

まゐ白彼をもとめぬ清く像元旅苦むりを歌
く作りて主人の歌を分るり 泥まんの清
き芹の根より丈に手洗川の芹を入て昔聖

徳太子解宮より橋宮く手門の乃人皆物れ
るよ伏辺の芹つひ女狂物さちる侵向せ女
は女日田の森を交て芹をつあり手をみを入る
ゆを許さすとやはいちるみ路を丈夫を思こ一
て此とりもとめり是を芹摘の辰も勝女娘とも
ゆ一氏社地も今里人い泥の旅より名ゆめと定
てさるんはき人の像をて芹い人の名教一ともむ
と云氏て渡する旅之【図】いきの辺芹女ある不
第に丈情の会釈をんはきも芹の匂ふ旅は
○【庭】まの像をも渡する尾立のんを芹より
うりに接多丈像はもを渡伝あるる名い多む

□ 粥する時もむよりかもあり 水

まゐ白まゐを生てもいとはしと相時て笑する
河と云立人日の旅を分るり 粥する時もむり
思ひと京内接て多粥後を中まて一と七種
の清沢するを時まゐる旅く花い定住ある

あるは四字は仮名より助字は勝れる事なり
花はなくて花の名のみ多し今の世に
をもて花として花を引上げ引出し　○注釈
飯蔬食飲水便是人間の接続
□　物夜の下はまろ〳〵まち風　義
▲まるもの張りて物胸する件は是物戸出
の用をなす物夜の下はまろ〳〵まち風は物離
れ山もあるもあれて物胸物を出るは人
人命のきはまるもの人命のきはまるもの
子見まろひは放る度程は庄垂物胸〳〵
つて吸はるもは物〳〵来世の宣を何は拾へ
▲まろ〳〵見れば沢山はまるもの拾へれと次は種
のまるは奉もしみる　○注釈　陣中の四四と是
大は物夜出は下見は徘徊の解は注釈　教
盛の伏は屋軍の出はあるもの多と穂あるぬ世の
きは仮るもの見を拾へる件は因種の上は見

る物夜あるは武士と云ふあるは物夜の下と
いひ出さるる時は妻記の伏は四夜の歌と
■　山の方あるは〳〵屋おーやとて　宣
▲まるもまろ〳〵まち風は退風は勇四〳〵武士の形
と見は初体の門出を付さるは山の方あるは〳〵戸押
やりては月さきりの戸押退て寄拾四〳〵後
物を入るまつ件記を作号の母拾も引あるて
知れ四〳〵ま初体の我情は恨我るはあるき
やと候まめる風情は〳〵注釈　出体の足医は
□　まろれぬ見とやしる村四　宣
▲まるもまろ〳〵は拾あまま就れて弱き戸押
やりて出る件は入は見は拾の拾を付さる寄れ
ぬ見は　又見る村四は只拾の見とお怪
は裂れて苦むれるは村四の寄は弱れ
沒件拾は戸押やり出て情やあり号
やあると時記は見とおもとあるは消て

いとくきさを枕にうくと陽きさむる又人
和きれ拾くへさ、ぢやゝこのゝ人共ゝは又ゝ
今さう 園独森の爰若きさ時の色の青さ
ひゝ〳〵ゝのゝんゝやと隠くゝ伴ゝ兵れゝ ○園
小の方おゝの二句二意ゝ以上園白鶴と云
二句さゝ意の即と入さう悲こゝれゝ古の中
意ゝ〳〵ぬ白は九余ゝ意の下を入るゝれと
自も青ゝと宮ゝ青ゝるゝやゝ丈宮の所は園は
して丈と又宮ゝき白あり〻と所ゝ云
意ゝ意ゝ〳〵ぬゝぐゝは又分ゝ手ゝ拾て分れ
まおるゝゝ今の裏ゝ衣ゝ歌ゝきゝゝく

○家眺望

芳尼の落作ゝ時ゝ仮ゝ文ゝ〳〵ゝ一ゝ二ゝ三ゝ
ゝ〳〵ゝの退加ゝ二字殿ゝまゝおるゝあゝまゝ
歌二句並て仮ゝ歌ゝ乃ゝ〳〵ゝ浮ゝ〳〵ゝ

雁渓ゝ鶴ウン俗カウヴル 和名ホトトギス又ゝ
クロ和三 翅端羽黒中科表淡白有斑似
雁布地故俗呼曰雁降似鄙尾純白
嘴太長舌短小丈鳴也非声撃啄也
性奸水将雨則鳴仰鳴則晴俯鳴則
張ゝ雁月やゝ爰ゝ田圃の雁は彼ゝ科
のゝ雁のゝき脊とお爰ゝ形容ゝ又ゝ
無声の色孔雀ゝ孔雀ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ
ゝトヨアリ雁拾の田ゝ雁ゝ仮ゝ〳〵ゝ〳〵ゝを
今さう○園時ゝ詠 雁 園 鶴ゝ詠ゝ

冬孔雀日乃哀ゝ乃ゝ 義

冬白ゝ〳〵ゝ拾仮向ゝく時日の次安ゝ又ゝ丈
日の乃ゝきゝ付ゝ冬ゝの加孔哀ゝ乃ゝ〳〵ゝ
雁は白ゝ〳〵ゝ爰ゝ哀ゝ乃ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ
の加ゝ仮ゝ丈ゝ時ゝ述ゝ一ゝ白の時ゝ〳〵ゝ

さくよ且句掛懸続て斉一そのとく作るべ
一体の曲言〻 ○[産]句掛の問もまた俳諧の本
句を定て斉一そのとく考る而他は[産]
掛の余情紙毫よりも寸分の散号も
是より出り[産]何もあくて本句の余情加
の彩を除て直ちに作る案[産]哀あり[産]と
作る云不可後〻是を翻する時は[産]二文字
為る〻[産]産を日に正風の系口あれ共中古調
の余喫残り依て〻並ぶて句作の西鶴
あるよ句字まるる為哀こりと云所さ
る掛の芋体[産]石仏雖然翻抱彩択ま
明明て〻と並るる彩をおそ〻しる後
まりのつと加の彩をくしる彩日の二字ま
て本句の余情一〻所て彩まる予あれ只哀
こりと云除り皇皆掛象の中より十七字ま
抱抱と定て不の後〻と去彩一〻る注翻の方〻

十七字まおあり〻と定人〻法注よりも稀る

■ 櫻桃山家の体を木葉ふる 産五

[産]句の産の加のハレシアトハ初テ哀あり〻は問
〻定[産]日和狂の掛を付り櫻桃山家の体をナレ
テ木のたふるハ乃ふ彩時れ老けるあ〻むと
見るまを遠守言嵐彩れ巌をを海さる産
彩の常聲木の産を浸るもてむ〻と山家
の木葉ふるを〻一時は産をす姿を定て
北奥彩の侍懐い櫻桃さ〻れ彩と感を忍義の
説をあ守ち中の掛〻〻加の哀年日和占の清
とて〻小関の掛を云言山家の体ト者三の作を
分〻り[産]ナ〻ナレテの問を合さり片り ○[産]彩
の加を産彩のよりやら〻り[産]句掛を悔彩
きあるよ産を産を宝さり後赤雅義掛露歌
降木葉只〻脱人彩在地仰見明月氏
形産を翻彩て加のあ〻さ句彩〻産を付

うち[囲]田家の庭和と木葉ふるを見るまゝ
家の作とて作毛分白あるをうゑ来て是
ふゆをまちぬあり

■ 引たる牛の怪さあれたく　社主

[囲]おの白木のもふる[囲]向風ふく山路をひ昭む
作ト又[囲]丈物の用を分てうつる牛の
怪さあれつゝハ怪い山家の用ゝて風よ
向て延ある牛の引たるゝ怪よ彼方
代方の古木ゝ蕎の支て考ゝく怪乃
ちゐるく拾をつゝと作ゝうゐ[囲]ハ
ゆの立ゝる辞くつい怪くきゝとゐふ
の一方へ付て和く付め者をゐふ白くい
又度ゆゝめゝるゐの和くも務ゐ牧そ
こゝ付て班すゝして中く拾をゐ白度
世ゐゝゆくゝとおゝあるゐの拾ゝゐふい
泥ゝゐ　○[囲]山家の怪ふ自由ゝて海辺者

く家ゝ作ゝ怪[囲]怪さ自きつゝとゐふゝて
山中の峻を入ゝて[囲]ゐ怪一段ゝ

□ ゐるゝ和き呉ゝ月の尾ゝと　和宝

▲おゐ引つゝ怪ゐの拾おゐ要て通めゝ作
ト又ゝ戦ゝの拾を付ゝゐるゝ和き呉ゝ
ゝ月の尾ゝとハ陣中怪ゝて俄ゝ事て
する途中の変を言ゝ月ゝてきお渡の
神のゐるゝ往てゐゝを考ゝ家ゝ家ゝを経
て敬地を拾ゝ拾ゝ　○[囲]体ゝの狼怪ゝと又
ゐゝゐるゝ和き呉ゝゐゝて呉ゝゐゝ呉怪おくも
ゐゝゝ又ゐる甲変の軍怪の作ゝ怪ゝ接ゝ
牛引ゝ怪呉ゝ怪呉ゝ怪の用ゐゝや[囲]ゐゝも
和き呉呉ゝて辞ゝゐる軍怪の作ゝ又ゝ
ゐゝ少怪ゐゝ氏田ゝ怪ゐゝゝ作ゝハそ
尾ゐゝ[囲]呉牛見月而常のゝ呉ゝ怪て廉
ゐする怪くゝゐ呉ゝ呉ゝいゐゝすく

■ 殉とる事と蘭きりよ生　地水

[illegible]

[illegible]

[illegible]

の万葉集の歌を付さう例時て
不二又曰る方ハ雨と雪多き秋の比なれと
ふ時むとは合する方は天より始し連歌
おもふる比めろと不二の雪孔歌さい往
文治きお拾く国れ上臣れ向夜伏拾り
ち不二又の万の山を雪片り因おおよりを
年の不二あれい例時てと力を入さり片り○
注釈はて又ち出ハ誣云く

□ 叙として桂のむ孔歌る方　五

雪の日おサヒ手ノ例時て不二又曰る方ハ月と雪
ち年の歌を付さう家として桂のむ孔歌る
方ハ月の国は山ハ多きちおるは時
の芽散むとち出不二の相孔せは曰る
眺て月方も方め古雪のんを思ふおら〜
見〜きむのさふ〜歌る方を少て二月ふ〜
初て雪年歌を歌の仮をおすとお孔〜る

拾く　○注釈今釈ハ一月く

○ 雪は年を降る風の雪　五

雪の歌る方ハ方お迎の桂と又ち風は孔を降る
のむは映する日の白の雪を雪と又曰る拾を付
さう〜おは孫おき仮く家に歌として片孔
日歌むの方るはおるき仮と方ち百千方あ
く谷信の孔ち〜今釈する下く○雪拾年
比の浪く雪漢関は拾雪と曰を雪方として和語
は用ひる云く猶は方る川文の上は仮んもウ
と又と返り月ふ〜用は月国雪方は雪
を降ると曰ふ云を又て桂は雪の余情孔は
注釈孔雪の白は関雪の白は雪雪は方は雪拾
映孔すは雪拾孔雪く

□ 雑追は方る方〜の廿五三十　水

雪の白雪方の袖を風は孔て雪拾を雪は方む
は曰と又ち大孔袖の拾を付さう雑追う

[illegible]の女五十[illegible]度女中のおなるを[illegible]
[illegible]衣の袖口に映する夫沢の[illegible]
く[illegible]西[illegible]れ[illegible]
き地一変食に出[illegible]る雑を西より近て東[illegible]
七年より近て西[illegible]
[illegible]の[illegible]
女の[illegible]衣の[illegible]
[illegible]巴山[illegible]
二三句[illegible]
句[illegible]

■ 夜に木[illegible]作る[illegible]の[illegible]衣

[illegible]の女五[illegible]
[illegible]
[illegible]の[illegible]衣と八一町[illegible]
木[illegible]山の[illegible]作[illegible]
を[illegible]七木を[illegible]

妾を巴山[illegible]に[illegible]て[illegible]
男出[illegible]に[illegible]巳美仲と成て[illegible]
い[illegible]に[illegible]の[illegible]
[illegible]美仲に[illegible]
[illegible]
[illegible]
大[illegible]
○[illegible]の[illegible]の[illegible]
造[illegible]
[illegible]

□ 夜保き山橋に[illegible]尺む　今

[illegible]衣[illegible]不[illegible]
と[illegible]に木[illegible]作[illegible]
保き山橋に[illegible]
[illegible]故[illegible]を[illegible]
移す[illegible]て山橋[illegible]

春月のはい木ゆゑに後の橋も感ぜられ又
も移植て橋橋と一附の脚とさもしと奇ぶ
あるは取あつき拾く〳〵山橋の宿とせる義植子
こと六月まき実あり　○頂園木者作るる木
下実と白七山橋よ山中の思あの拾と付さ
りに有る接の位とくはい山中みす因橋
い杜丹こも奉の付あれい橋杜丹と皮よ人
むとつふんに逆ろ

■　麻刈とつふ奇の葉あむ　義

◆○六月の橋人むにあ好と牧人ト人と
文よ能ての用を付ろう麻刈とつふ奇の葉
あむにさくさに麻刈とつふ夏の朗詠のく
葉る拾あれいいて山ほく分入後咲あら
めて夏橋の面を加あて橋麻とつふ句あり
て狩よ拾葉の師よろむと為と思付て
ゆよ夏橋人まあり成る牧人の奇表

を述てう　○頂園五月まつむ橋の奇と月
木芳の人孔袖の歩くするとつふん山丹よ
風雲とき付て故人を奇人と牧人に拾あむ
山橋い山よあるむ橋らあす

■　たとえく独乗尾と世と拾て　五

◆○麻刈とつふに余句さいはれぬ葉ろんし
と奇ふつふ月よ人と頁次の月を付ろうにをを
く独乗尾と世を拾てに独乗尾伊葉の麻刈
とつふ拾葉するを少かに実て日彼月ろ陰云
ろ独乗宮は数て独乗尾と号あい頁記て
ある志倦體痕則拾羊取奥に拾よ狗舟
葉に寸あろう葉に号あいにそてすむ平後あむ
を伊あに世拾人の麻刈あ〜世原ろいさの人を求
しやとあて蓬刈にそて独乗世拾の孫いあくと
もにの因あむとさく南月の奇人の文
盲あるあもと大会ちく拾く○頂園拾く法

こゝ【産】にさきくいにしへ人の作りし所なり拙年尋ぬ
ふ情美味の人は百注之
□ 我が月出よ月を歌ふる　玉
◆ふる世を捨て捨てさきに歌紹とさしげの
作り又古を述べこゝ年月出よ月に歌
ふるとハ傳上の明月を望て我業隆の稿
の歌を新しい高洗性の月をみるく垂世
者の至感人心【テ】よハ我月の成りの歌
を月出よとよ作り【産】れす
□ 接衣笛は高むを打掛　笠
◆ふる我が月出よ月出よ月の歌ふ
歌を歌く何と又古接中の後歌を作り接
衣笛は高むをお拭と月遅き歌接音
のおさしさは遅は吹情る花吉原の歌
ふてふる年く笛接出て行袖は高むを拭
て月まつる一曲を調る拭く○【産】歌を月

は是ある云の始を交人と又さり夷高む
て不吉て俗人の作は吉後句の歌
□ 篁雲許す木瓜の山百　水
◆ふる笛は高むを拭ふむす袖の広狭き岡
陸の作又古高むの篁こゝ人の俗人
を作り云ふお許す木瓜の山百ハ内裏固の
武士の山木ふるまい中途の品を云ひ孝人目
梯ふる山百て桑こゝ出第千るは瓜は改
さぬ秘瓜の笛を出す木瓜の盛を入て一曲
を調ふ作り○【産】篁雲ハ宰雲ふ
むは尾るは云て【産】ロウゴレと仮ふ作り
■ 宵を入てそろは候おり　義
◆ふる字おカク人は為テ許す木瓜の山百ハ又
古又拭の歌を作り　笛を学を学ら義
必作き作く作ると出て彩ふる木瓜の盛を又
て無笛はあえ一古戦拭の昔を思て歩行

するおろそかなる晒の白骨を人てヨハ何人の尸なるそと出哀の情を催し堂候はおろそかに回向する程に○園係人骨を今我もかくなるなと歎く件に附記し志を人に廉はみるそ

□ 与食の骨と其の骨と共に我死の記附する体

◆骨を人て候除すら我死の記附する体と共に尸葬る拾と付くうち食のうをカレテ

骨を東雲に対死の仏作はまは骨一尸を手程の子を捨て東の子の思て歎はは吊ひ地晒と成し骨を見るき其こは居食する与食は身体形に丈骨を与て已る穴を埋去除く埋て卒塔おく拾く○翁ぞくろをうのよ色て陽る拾に接系こぞくうるうのよいそぞくろの色るくき文見の後一体の杖孔そくろの丈体もあり園茶毘不は様する多信を与食の情て時のうのを拾す拾

に接系こと食はうの骨のあるや全体骨ふに肉孔切の外はきそれすと見て体周おるあく骨て骨ふ見て骨ふ骨地を骨ふ骨を骨て骨ふ骨て自他の子は用る肉みそて

□ 泥の上は尾をひく跡を捨ては

◆骨を志のめは透見て陽おを孔丈をもすむとうのと骨て骨ふ体と丈を与食のみ分辺の用を付う泥の上は尾をひく跡を捨ては幸陽和く野辺の陽さの様体泥は引る筋を丈分て大多る程拾孔と泥まれて拾ても陽孔す丈う用意和骨みれいうもむと丈日寺後四は彼の見うる与食みれい教海孔打孔てうの骨孔引をて孔利せてうん野設ヒと弄陽る拾く人見乗曳尾に義人く程に子体骨く独彼さる家は産家は磯四はうて及上り拾を打て体を存く丈財

るて干潟の清泥まれまる頃辺に五月比是を拾ふ多し又乾て高る時庭雪見窓を投をてもとるべし○園田の白菜ように付こうい絶い根とするを殺と付るい俗に之を捨て助の指に挿象因胃をもむいらめくちへ殺をもむは奪こうに俗の家へ

■ 江戸行はすむ多乃白菜　五

多白泥の上に庭をひく殺を拾ひて奉れ仲と足立丈に絶ての用を付こうに行に進る多の江戸行ように園川牧の江戸に曲菜氏水毒を絶する江戸菜を奪て指て多の泥字を記こうに○最進もるっぷ枝り

進む長人当りのるよかて奪るるいあさ

園養老江戸の俗に渋く苦味さる泥ふ

■ 殺はてる手のさて汁のむもつ　水

園多白水の菜奪多泥乾附の江戸人立

丈物の指を付こう殺はてる手のさて汁のむもつしに早挨田泉の幸苦を陽ふ江戸幸そ夏日長愁民とて指あり泥 ■ 物の指根ふれ奪を止て江戸菜を洞する水求る指

○ 苦之泉ふまぐ〳〵長周つく的　豆

多白苦天の指を付て指の辺に乾干る俗に立丈用を付こう苦泉ふまぐ〳〵苦を入つく

的に泉ふまぐ〳〵日文よき片瀬町の泉毎

反仕込のたを搗て手奪る指と会白に

く作て対孔い泉するふる反次て

に海を奪こう反仕込に俗物の加を

指に用て搗るを苦園れて

□ けし尼の小坊文に御殿　今

多白苦泉ふまぐ〳〵乃田舎三彩目年

炭周つく俗に丈丈人を実に指と付こ

りけし尼の小坊文に御殿に俗き

尼ちよ和小侍も来そめけ尼もお
もれて炭園掃こう掃こうするをうてア
他人の子多く業集仏の乃に教もセ寺
かゝる拝業のこすする尾まもあり炭園
坊主とゝるもは尼おむとおぞてるこ掃
こ辺ちゝ者ち業集て織紡耕作ケ
掃の子ちとするちあり　○注釈　伸白
て炭園ちく侍ち子供の掃く掃く小女を
尼とゝ小童を小侍とゝ関東の通語
釈ちあ寺ち並おく掃く件い次の子て
□　をゝく草乃実たる草の実　義
余白お掃て寺尼ちの座ち余念ち掃く件
ゝ左ち乃ちのり来を石掃を分ちう をゝく
草の実たる草の実ハ草池の辺に掃ち
者ちを尼の眺て来掃きち多ち悪
有仏と育る所のんゝア草のをゝち

拙る女の分い中乃ち多ち乃ち乃て出来ちゝ
きゝ子もあゝと験余の涙ち寺掃く△
おゝ尾ち他ち小侍ち掃ち尾
ちち子ちを嫌む掃ち記情ちう○注釈
尼小坊とゝ子をゝ掃ちたると拍子ち分
ちう毎ちあれて寺掃ち辞遠ちをく
たる草の自拙をゝたるゝ子ちあゝ
□　辞ちち仮ち歌く月の前　五
余白川辺ちる草実の をゝもたるもれ
乱ある件ゝ左ち其坊の掃を分ちう辞ちち
仮ち歌く月の前ゝ独侍の尾ゝ月ゝ
ちゝるち左ゝ夕食侍ちあゝと仮
ち乃ち歌ゝるち乃ち分ちをゝ乃拙て
草の実ゝ辺ち乃の跡ゝ件を月ち透
ゝて会余ちの和尚ち子美園ちち跡ち子
も仮の山ゝ侍ちめちあもゝと独笑する掃ち

○[注釈]茅生まちと行くうり夕月の吸ひ歌く
仲原林人不知月来お恐の人兵衛
おゝ月の鶏トアラハ月の歌くるゆゝむ
■ 高砂おく狐風や必しき　ホ
◆おゝ白ケテ静さる吸ひ盗マント外ヨリ吸ひ
歌く月のお上圏ま見ひ上ま隠む初を付
さう高おく狐風や必きトハ森法一度
吸ひの吸くそむと彼宮ようお狐の入て
さうられとかく桂あれいすぐく降る声少
てさそそきおよひもうむとは食乃
月ま忘れて時ひ拾ゝ歌くおを狐と見ま
一あま□係付すうう美ま歌く人を
事あい遠扉とあむ○[注釈]辞ある月ま狐
あく歌きの仲ま一枝く
○ 狐村ま尾根を茨くる行庇　ヒ
◆おゝ白風の吹高寺高ま信て狐の必むゆト見

ま見ま指さ付くうり狐村ま尾根を茨
くる行庇トハ柱二本ま横木を結行庇く
なる宮家の狐村小尾ま見ま見辺ま宮住する狐
の尾根の高ま木の高の風まちるを高を
穴ま入むるゆを教てあく拾ゝおの
高い時あれい宮ま見宮あをちくう　○[再板]
尾根ゆのれト信くう[内]さ付ま七白ま要乃
引続の拾り仲て紀行をあるうをかる走白の
文ま信ま事ま加ゆる都拾ゝ拾ゝを失むゆ拾ゝ
茨ゆま紀行仲ま付ゆハ拾ゝ拾ゝ白ま
附会する高ゆき高ま拾き白ま信そを走白
の紀りのと出移りむ式七白拾集の数をぬ
き平生ま付れい沐ま人ま高ゆ高ゆむ保く見
ゆむ人い炭俵の洞宮ま拾ゆうもいもむ
■ 豆数作て母乃喪ま入る　水
◆おゝ白狐村ま尾根茨くる行庇付ル

作人左衛門用を分きり豆数作て母の喪まへ入
るゝ狗物する所ア人ハ豆数なとてもおれい
手作の豆より豆数も作り服あく時い喪
なまへ入て作者の和名さる嫁振あと乃
拾ゝ國大和ゝ国今も上代の遺風ゝて美
家ゝ作ゝ寸強作て喪ゝ入る極て片庇
作ゝ寸注釈おゝを喪なとゝ尺ゝ寸ハモ

□ 久改の孝ゝ孔注釈も破ぬへ　義

▲おゝ母の喪ゝ入分母ゝ至孝の人ト久左衛改
るゝを分きり久改の孝ゝ孔注釈も破ぬ〳〵ハ
供者の豆数も自作ゝ作ゝ為き衣の袖をすり歎
の涙ゝ孝の袖も破ぬへ〳〵ア至孝の人ゝ為る
ゝ園秋の初孔孝の袖ゝ花為ゝ生て拾く
袖と左ゝ母ゝむゝ為ゝ思ゝ生て久改の心ゝ為す
るゝん孝の為ゝ友達あむ注釈久改い蹇
の母を負て孝ゝ為ゝ分延山信孝子ゝ

注釈久改ゝ根の土石井手ゝ死ゝて出ゝ
孝ゝ為ゝ為ゝ孝ゝ創ゝ尺ゝて寂寞分
ゝの法為ゝ多ゝ状ゝ徒ゝ迷ゝ為ゝ委ゝ

■ 伏見木幡の達花ゝ人　兮

▲おゝ孝の袂も破ぬへ〳〵ゝ彼衣の袖ゝ為る母
く去ゝ為ゝむ伏見左衛門の歌を付きり
伏見法田の達むゝ左衛門ゝ伏見法田の人ゝ
のひゝゝゝ孝のむゝ為ゝ達むゝ為ゝ
むゝ為て山ゝの去の夕為る束て為ゝ人ゝ
達ゝむゝ為ゝ為ゝ為

男猫一つを捨てゝ八猫なき時の事なり
ものやちこの入れあるよりもの猫いみや猫
ぬ肌いせずや犬まいとられすやとも行すを
猫痘の又てアノ性悪猫一つ捨てゝ逃るよ
さらつのきあるく狗の門いさそ八疑証みゝし
と男子捨て因まゝ男子女を恵る故よ男猫
と伝えり ○産翁性悪猫の出あるくを泳ふ
うさうよ内別れい捨てゝ見る件ハ自他
返し次の白ゝそ別人の自白あれ

■ 去れ白ゝ

五

白男猫一つを捨てゝ牧出する件ハ又吉貝
用を分ち去の白ゝ猫ハ去家れの
脈君とおもてまゝ猫抱出て雪掃をとられ
よくより金ほよあくられて呼ぶとゝ書を思
れむきれい及通所をれすと宮ふ振自保
国まれて伝あぬ分のうさを去ゝる

情あむ〈ゝ〉おいをゝぬ猫の鳴あれい寝ゝて猫
の姿をゝ去ゝ ○産翁去ゝもの声ゝゝ猫を
ゝあゝ女三宮の伝ゝる又よハ性ゝ

■ 水干を乗乃白の雪美やゝゝ

水

白男掃を降て下弦ゝ手る件ハ又ゝ客の
所ゝ指を分ち水干を乗乃白の雪美やゝゝハ
伝性者の舎ゝ葉ゝ示る人の中
ゝ乗乃白ゝ人ゝ陽稚る人の
美やゝゝ稚ゝゝ入除ゝ
ゝ稚ゝ ○産翁白ゝ
ゝ乗乃白ゝ件ハ振象ゝ

□ 山茶花白ふ宝乃木鼠、宝

白美やゝゝ水干ゝ振稚ゝ又ゝ鼠
犯人の姿を分ち山茶ゝ白ゝ宝の木ゝし
ハ風除ゝ宝ゝ白ゝ稚ゝ振ゝ内ハ二
白ゝ白一部ゝ宝ゝ所の振白

る秀句と存じ奉り候の風と笠の山茶むを
一句は張て拳白とゝ〳〵ゝ片り ○注釈 至万
段持〜笠片垂れし

追加

ふるゝことは[illegible]牛をうゝ最 拾遺
[illegible]大木葉州小田の郡狩上宮よりふる嘉むめて
名をうつゝとそつゝるゝ又行助法古寄れの連
寄[illegible]を力て名を内拙のあれ〳〵さるを牛
の絵きをうつさ[illegible]れ和とと仕法を捉るい
山風の発明しり

□ 桜大はあふる枯原社 松 長号
注釈本白を牛追の叢淡て休ふ仲ゝ又皮
桜の男を付り桜大はあふる枯原の松 ふ
こい桜大和て国のミ小風を淡くは牛い
嘉よあれ和をつゝこいるは又とと寄衡を

滅る拾て枯原の松は落るき之さ
をつゝせり片国半まそい牛十匹和と
ツ連引て他を〳〵嘉を寄一り仙地そも
牛岩ゝ信は嘉和ゝ〳〵ゝ和るを白て
牛原ゝそこは拙宮国仮い乃孫求
原て記弘牛の人は住て嘉拙を分す
国も拾和〳〵あゝてのむ片国国を腹め
て之を拙を清くゝう云和て出越大嘉
大桜大は桜大はれ和をゝゝふは桜出り
人は之の岩信ゝ岩は松根和とは嘉て
休む和は木の根を住守る和ゝ片り

□ 木賊州下長は髪を素容て 和五
[illegible]お白桜大たゝの法き葉て落る仲ゝ又を又
人を付ゝ木賊州下ふは髪を素容て
は桜大ゝ長を法ゝ拙ゝ国下長いてゝ和まて
むの拙素容髪い油も付一瓜束ゝ田

舎の指ゆり○国家高大を以大僕の社るとと
又て木祇州の能をする振に掃部之
■ 捨宝は宮をやつす郭者 杜宝
▲彩白木祇州ノコウて品は髪を奉答
て白と又宝人自思ふる指を付ス捨宝
は宮をやきす郭者は欲地を使通る我
又の指石も別の宝物ハ古品は分
を活し事も侍ふ世の成りを使を押
る指之 ○国山路の使に掃部国宮方の
は報ハは供事の人と門出の件に後白
の或人妻 意に淋く
□ 白ふ事は捨をむ月の法 翁
金白宝ふやたす宝品の経歴又宝又
指の用を付ふ白浪は捨をむ月の力
多ふは月頃く浪石の郭朗を眺てイ
ふ又く捨妻の来れ事郭供の相使は

と白浪出て笑むと云りを捨妻のあき
ま呆ていふる人やといくもりすず南紀
ふる指之 国翁 月ハ 指ふり
● 花は指をすうて岐阜山 地水
国ふ白楽石の捨捨と又宝又地は服の楽
を付ふり 吊先事いやりの附ふ白を又
浅りりされも白白浪は捨笑むを河乃
変化ハ 宮ハ月の河宝月の名原の郭名
まて戻ふく捨売笑ふ件と又宝ふり指も
ふき百石の船と白浪の河も記指を
原ハ力いふ絵て白の浮注まあ原
巳宝は因て白楽社宝てふるを
述ら供ふんふりり

冬ゝ日注終

風の初なるかたち定象表

六	九	九	五	五	五	四	三	二	一	一
五	六	土	四	四	六	二	二	一	一	一
四	四	五	四	四	八	二	四	四	一	一
五	五	四	五	五	十	一	一	一	七	三
五	三	七	三		十		六		三	一

乾 ○
昂一昂二昂一 ●
昂一 □
□
■
■
□
■
■
■